

2025 年度 日本語教育実習報告書

東京女子大学

日本語教員養成課程

はじめに

学生の皆さんは、2年次より日本語教育の学びを積み重ね、今年度、日本語教育実習に臨みました。その一人ひとりの歩みと学びが、この報告書には丁寧に刻まれていることでしょう。日本語教員養成課程を修了する皆さんの進路はさまざまであり、日本語教師として歩む人は決して多くはないかもしれませんが、しかし、この課程を通して培ってきた「伝える力」「受け止める力」「協働する力」は、どのような場面においても必ず生かされ、社会と関わりながら生きていくうえでの確かな基盤になるものと確信しています。

日本語教育実習の実施にあたり、ご支援くださったすべての皆さまに心より御礼申し上げます。学外実習でお世話になりました各日本語学校の先生方、事務スタッフの皆さま、そして学生の皆さん、本当にありがとうございました。

また、今年度の学内実習にご協力くださった参加者の皆さん、参加者募集に際してお力添えをいただいた関係者の皆さんにも、深く感謝申し上げます。

多くの方々に支えられながら、本学の日本語教員養成課程が継続されていることを改めて実感しております。今後とも変わらぬご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2026年2月吉日

日本語教員養成課程運営委員長
日本語教育実習担当
松尾 慎

◇2025 年度 日本語教育実習報告書◇

～目次～

はじめに

日本語教育実習の概要	1
「日本語教育実習」全体の流れ	3

実習報告：学内実習（フィールド実践 A）

ことのは	9
夏野菜炒め	25
ビタミンC	41

実習報告：学外実習（フィールド実践 B・C）

2025 年度 学外実習受入日本語教育機関	59
インターカルト日本語学校	61
新宿日本語学校	73
友国際文化学院	89

実習を振り返って - 個人レポート概要

学内実習（フィールド実践 A）	101
学外実習（フィールド実践 B・C）	106

日本語教育実習の概要

1. 日本語教育実習の目的

日本語教育の実際は、多様である。日本国内においても、日本語学校や大学等教育機関として長期的に日本語教育を行う場合と、中国帰国者や技術研修生等に対して短期間集中的に初期指導を行う場合、また地域の日本語教室のように地域を基盤として行われる場合とでは、日本語教育の目的や教育内容・方法等に大きな違いがある。また、たとえば日本語学校であっても、学習者の背景や、教育機関の設置形態、教育設備等の環境などさまざまな違いがある。国内と海外では、社会の言語環境など学習者や日本語教育の場を取り巻く環境も大きく異なる。そうした多様な現場において、教える立場に立つ者に求められることも当然同じではない。

この日本語教育実習では、大学を卒業した後、どのような日本語教育の場に関わるとしても、そこでの日本語教育が何のためにあるのかを考え、学習者や学習の場を取り巻く環境をよく見、そのうえで自分がどのような役割を担い何をすべきかを判断できる力をつけることを目標とする。

2. 日本語教育実習の構成

「日本語教育実習」は、以下の3つの部分で構成される。(図「日本語教育実習全体の流れ」参照)

① 事前準備

講義等による指導を受けると同時に、学習者のニーズや日本語教育の目的、学習環境などに関して事前に情報収集を行い、自分が関わる日本語教育の位置づけを理解し、自分の役割の明確化・実習の目標設定を行う。

② フィールド実践

実際に、日本語教育の現場で学習支援の活動を行う。その際、目標設定に合わせて、振り返りのためのデータを収集する。

③ 振り返り

自分自身の目標に照らして、フィールド実践がどうであったかを収集したデータの分析をふまえて振り返る。

学習者と直接向き合って学習支援を行う「フィールド実践」を中心に、事前に自分が関わる学習の場についての情報を得る「事前準備」を十分に行い、実践での各自の目標を設定すること、また実際に自分が行った学習支援活動について、自分自身の意識、学習者の反応、指導担当の先生をはじめとする受け入れ期間の人々からのフィードバックなどを踏まえて「振り返り」を行う、これら3つの部分全体をもって「日本語教育実習」とする。

「フィールド実践」は、以下のA～Cの3つの形態で実施した。

A. スクール・シミュレーション型 (学内での実践)

学内に学習者を集めて5日間の日本語コースを開設する。コース設計から、学習者の募集・選考、教案作成、授業実施まで、全てを学生が自主的に運営して行う。

B. 短期集中型（学外での実践）

学外の日本語教育機関において2週間程度、集中して実践を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

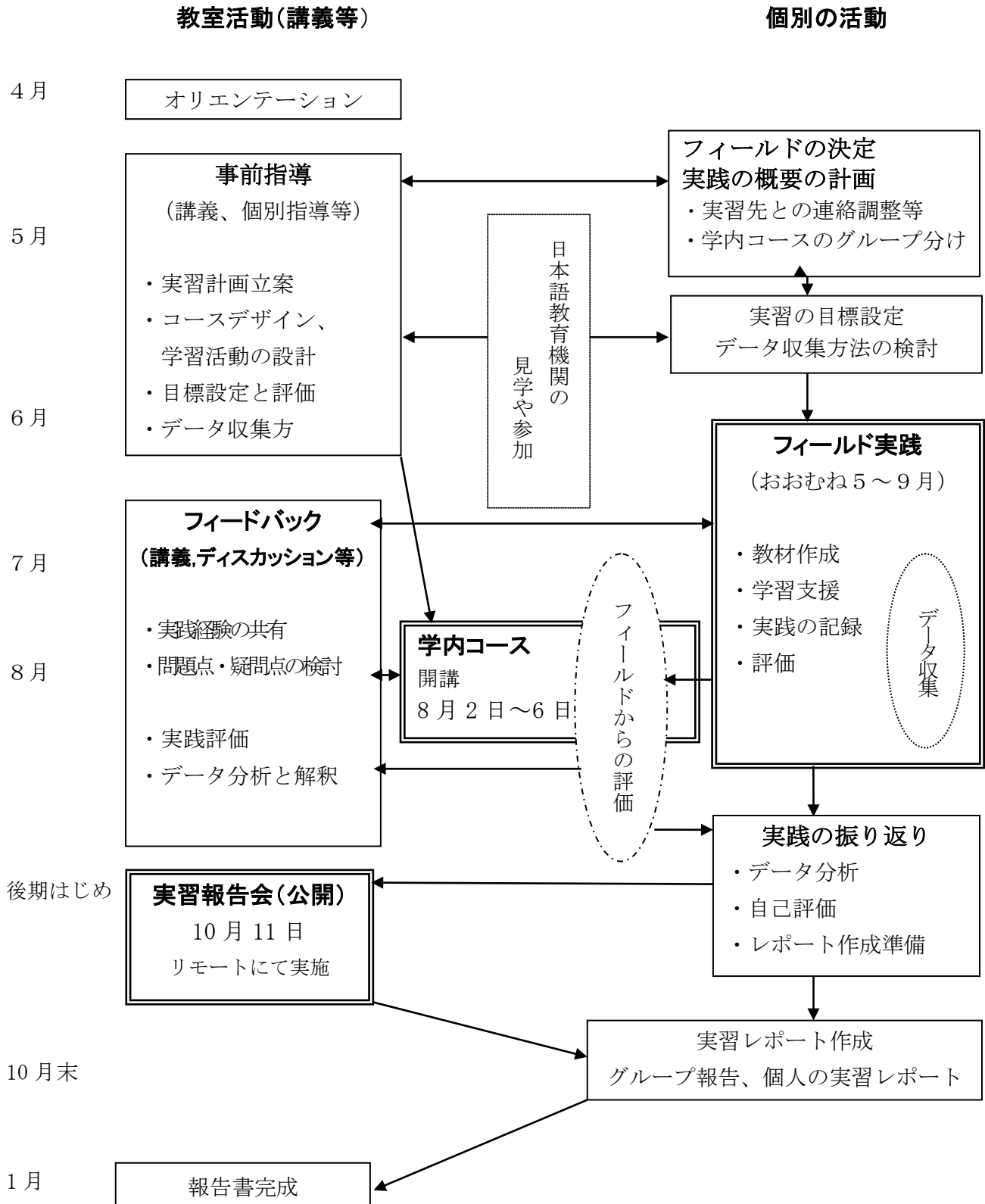
C. 長期継続型（学外での実践）

学外の日本語教育機関で、一つのクラスに一定期間（2～3ヶ月程度）継続的に参加する。いわばティーチングアシスタントとして、クラスを担当する教師と共に、授業に参加し、学習支援を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

フィールド実践と並行して行われる毎週の授業、あるいは実践終了後の実習報告会では、それぞれの機関での実践の経験をお互いに共有することで、自分が関わる教育現場（フィールド）の特性をより明確に理解し、そこでの活動の一つ一つが、何のために、なぜそのようなやり方で行われたのかを考える契機となることを促進する。それぞれの異なる経験を共有することによって、自分自身の経験をより広く深いものにすることは、教師に求められる重要な行動でもあるからである。

これらの過程を経て、実習についての報告をグループごと（学内実習はコースごと、学外実習は実習を行った機関ごと）に作成し、各個人の振り返りをレポートにまとめた。

【実習全体の流れ】



◆実習報告◆

学内実習
(フィールド実践 A)

にほんご

日本語クラス

さんかしゃ ぼしゆう

参加者募集!

とうきょうじょしだいがく にほんご まな
東京女子大学で日本語を学ぼう
2025

8/2 土 → 8/6 水

ばしょ とうきょうじょしだいがく
場所 東京女子大学



でんわ じかん
電話できる時間

か もく きん
火木金 10:00 ~ 17:00

すい
水 12:30 ~ 18:30

うけつけきかん
受付期間

7/1 (火) - 7/25 (金)

でんわばんごう
電話番号

03-5382-6508

メール

nihongo-jisshu-gakunai-all@gr.twcu.ac.jp

アクセス

にしおぎくぼえき ちゅうおうせん そうぶせん とうざいせん
〈西荻窪駅から〉 JR 中央線・総武線・東西線

きたぐち ふん
・北口から歩いて15分

きたぐち ばんの ば きちじょうじえき い
・北口(1番乗り場)から吉祥寺駅行きの
の とうきょうじょしだいまえ お
バスに乗り東京女子大前で降りる

きちじょうじえき ちゅうおうせん そうぶせん とうざいせん
〈吉祥寺駅から〉 JR 中央線・総武線・東西線

きたぐち ばんの ば にしおぎくぼえき い
・北口(3番乗り場)から西荻窪駅行きの
の とうきょうじょしだいまえ お
バスに乗り東京女子大前で降りる

かみしゃくじえき せいぶしんじゅくせん
〈上石神井駅から〉 西武新宿線

みなみぐち ばんの ば にしおぎくぼえき い
・南口(1番乗り場)から西荻窪駅行きの
の じぞうさかうえ お
バスに乗り地蔵坂上で降りる

おおいずみかくえんまえ せいぶいけぶくろせん
〈大泉学園前から〉 西武池袋線

みなみぐち ばんの ば にしおぎくぼえき い
・南口(3番乗り場)から西荻窪駅行きの
の じぞうさかうえ お
バスに乗り地蔵坂上で降りる



①コース 日本の弁当を知ろう

日本の弁当を知ろう

東京女子大学グループ：ことのは

～ おにぎりの歴史～

日程

8/2 - 8/6
9:30~12:30



説明会日程 (場所：オンライン)

7月14日(月) 19:00~19:30, 20:00~20:30
7月20日(日) 19:00~19:30, 20:00~20:30
7月25日(金) 19:00~19:30, 20:00~20:30

- ✓料理の言葉を勉強しよう
- ✓お弁当を食べよう
- ✓レシピブックを作ろう

レベル：初級～
募集人数：10人
参加費：交通費のみ

②コース 絵はがきづくり体験

思い出いっぱい!
絵はがきづくり
体験

レベル 初級
年齢 18歳以上
持ち物 なし
費用 200円 (材料代)
場所 東京女子大学

8/2(土) ~ 8/6(水)
09:30-12:30

絵はがきって何?
季節のあいさつや、感謝の気持ちを絵とことばにして相手におくるものです。

紙をつくろう!
ティッシュをつかって紙をつくってみよう! てづくりの紙で絵はがきをかこう!

ことばを知ろう!
自分の思い出をことばにしてみよう! 自分のことばで友達や家族と思い出を話そう!

【説明会の日程】
・7月11日(金) ・7月19日(土)
・7月14日(月) ・7月21日(日)
・7月17日(木)
【時間】 20:00~20:30

※どれか1つに
参加してください。
すべてZOOMを
使います

③コース 太鼓の名人になろう

太鼓の名人になろう!

説明会日程

7/7(月)・8(火)
10(木)・14(月)
22(火)・29(火)
20:00~21:00 (日本時間)

※どれか1つに参加してください。
※説明会はzoomで行います。

開催日: 8/2(土)~8/6(水)

<5日間ですること>

- ☆世界の太鼓について話そう!
- ☆太鼓を体験しよう!
- ☆いろいろな擬音語を知ろう!
- ☆太鼓の演奏方法を学ぼう!
- ☆太鼓のゲームをしよう!

応募条件

レベル：初級から
募集人数：10人
参加費：800円 (+交通費)

東京女子大学チーム：ピタミンC

◆ ことのは ◆
「日本の弁当を知ろう
～おにぎりの歴史～」

浅田真桜

柏崎咲月

高林紗楠

谷口幸

吉田夢

ことのはチーム

吉田夢
柏崎咲月
高林紗楠
浅田真桜
谷口幸

1. テーマ

「日本の弁当を知ろう～おにぎりの歴史～」

2. 対象レベル

初級以上

3. 5日間の目標

お弁当やおにぎりを作ってみる。料理の言葉を知る。味を表現できるようになる。

4. 学習者の概要

年齢	性別	出身	所属	アレルギー	備考
24	女性	台湾	JET 日本語学校	果物	
25	女性	中国	TCC 日本語学校		
25	女性	中国	イーストウエスト日本語学校		
27	男性	中国	ARC 東京日本語学校	豚肉	3日目から参加
27	男性	台湾	ARC 東京日本語学校		3日目から参加
30	男性	中国	JET 日本語学校	りんご、桃	
30	女性	中国	イーストウエスト日本語学校		
31	男性	中国	TCC 日本語学校		
35	男性	中国	TCC 日本語学校		
35	女性	中国	TCC 日本語学校		3日目から参加
43	男性	台湾	JET 日本語学校		

5. 実施までのスケジュール

4月						
31	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
				授業		
14	15	16	17	18	19	20
				授業	個人課題	
21	22	23	24	25	26	27 MTG
個人課題：『みんなの日本語』4課の分析				授業：実習 チーム決定	チーム課題	
28	29	30	1	2	3	4
チーム課題：発表準備						

5月						
28	29	30	1	2 MTG	3	4
			チーム課題：発表準備			
5	6 MTG	7	8	9 MTG/リハ	10	11
チーム課題：発表準備			授業：発表		個人課題	
12	13	14	15	16	17	18
個人課題：実習テーマ案				授業		個人課題
19	20	21	22	23	24	25
個人課題：実習テーマ案				授業		チーム課題
26 MTG	27	28	29	30 MTG	31	1
チーム課題：ポスター作成				授業： ポスター発表		チーム課題

6月						
26	27	28	29	30	31	1 チーム課題
2	3	4	5	6	7	8
チーム課題：テーマ案				授業：実習 テーマ確定	チーム課題	
9	10	11	12	13	14	15
チーム課題：ポスター作成				授業：※1	チーム課題	
16	17	18	19	20 MTG	21	22
チーム課題：ポスター作成				授業：※2	チーム課題	
23	24	25	26	27 〆切:※3	28	29
ポスター確定	最終〆切: ポスター提出	チーム課題：教案		授業： 教案作成	チーム課題	
30 MTG	1	2	3	4	5	6
チーム課題						

※1 ポスター作成、3チーム間での情報のすり合わせ（全体ポスター作成での役割分担/Googleフォーム作成/各ポスターに入れる必須情報など）

※2 ポスターの一次提出、ポスターへの助言/相談/修正

※3 HP掲載の紹介文、簡潔な教案

7月						
30	1	2	3	4 MTG	5	6
チーム課題：発表準備				授業：発表	チーム課題	
7 問題対応	8	9	10	11	12	13
チーム課題：説明会準備				授業：教案/ 応募者リスト	チーム課題	
14	15 MTG	16	17	18	19	20
説明会 第1,2回	チーム課題：教案			授業：教案	チーム課題	説明会 第3,4回
21	22	23	24	25	26	27 MTG
チーム課題：諸準備				授業：※4 説明会 第5,6回	チーム課題	
28	29	30 MTG	31	1	2	3
チーム課題：諸準備						

※4 店舗への許可取り、必要物資の買い出し、各自原稿の相談・修正

8月						
28	29	30	31	1	2	3
				切り： 学習者名簿	実習	
4	5	6	7	8	9	10
実習						

6. 5日間の概要

1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・お弁当の歴史を学ぶ（駅弁、キャラ弁、冷めたお弁当について） ・おにぎりについて学ぶ（おにぎりの歴史、具と形について） ・おにぎり作り
2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・切り方の名前と飾り切りを学ぶ ・飾り切りの体験 ・料理の言葉を学ぶ
3日目	<ul style="list-style-type: none"> ・市販のお弁当と手作りのお弁当の違いを考える ・キャラ弁について学ぶ、キャラ弁作り用の道具の紹介 ・キャラ弁作り ・4グループに分かれ、吉祥寺へおかずとお弁当グッズを見に行く
4日目	<ul style="list-style-type: none"> ・味を表現する言葉を学ぶ ・実際のお弁当を見る、試食する ・レシピブック作り開始
5日目	<ul style="list-style-type: none"> ・レシピブック完成 ・5日間で学んだ料理のことばを使ったかるた ・完成したレシピブックの紹介

7. 5日間の活動内容と振り返り

以下の5日間の教案は、一部抜粋したものを掲載しております。

【1日目 8/2(土)】おにぎりとお弁当の知識を得る。おにぎりの握り方を知る。

時間	活動内容	備考
9:30~9:40	【挨拶 (10分)】	進行：吉田 【準備するもの】 ・名札用の紙、ペン、スライド実習.pptx
9:40~10:00	【アイスブレイキング (20分)】 自己紹介	進行：吉田 【使用するもの】

	好きな食べ物について話そう	・スライド 実習.pptx
10:00~10:25	【お弁当について学ぶ (25分)】 ・ 駅弁について ・ キャラ弁について ・ 見た目を大切にすることの考え方 ・ 日本は冷めたお弁当を食べることの説明	進行：吉田 【使用するもの】 ・ スライド 実習.pptx 【参考文献】 加藤文俊 『おべんとうと日本人』（草思社、2015年）
10:25~10:35	【休憩 10分】	ホワイトボード、ペン、消すものを配布
10:35~11:00	【おにぎりの歴史を学ぶ(25分)】 ・ おにぎりの歴史に関する選択肢ありのクイズ	進行：吉田 【使用するもの】 ホワイトボード、ペン、スライド 実習.pptx 【参考文献】 ・ 小田きく子『ブックレット 近代文化研究業書3 おにぎりに関する研究（第1報）』（昭和女子大学、近代文化研究所、2005年） ・ 加藤文俊『おべんとうと日本人』（草思社、2015年）
11:00~11:20	【おにぎりの具や形を学ぶ (20分)】 ・ 三角、丸、俵の形を紹介 ・ 鮭、梅、昆布の具を紹介 【ペアワーク会話練習】	進行：谷口 【使用するもの】 スライド https://x.gd/a15U8 【実習生】 後半、パックご飯の準備 2名
11:20~11:30	【休憩 10分】	・ おにぎりの歌を BGM に ・ 食材の準備
11:30~12:10	【おにぎりを握る (40分)】 ・ 説明、実践	進行：谷口 【使用するもの】 ・ スライド https://x.gd/M6iq9 ・ パックご飯、サランラップ、手袋、百均のコンビニおにぎり風フィルム

		【具材】 鮭、梅、昆布、塩、ふりかけ、のり 【アレルギー対応】 ・りんご、桃1名 ・豚肉1名
12:10~12:25	【終わりの挨拶（15分）】 感想、質問、明日の確認	進行：谷口 スライド https://x.gd/aI5U8

《良かった点》

○アイスブレイキングに関して

学習者がかなり積極的に発言をしてきていた。また、順番を指定しなくても、自然と次に発表する人が決まったりクイズでも質問をしてくれたりとかなり学習者の積極性に助けられた部分があった。

○クイズに関して

おにぎりに関するクイズでは、学習者の方から質問をしてくれ盛り上がるタイミングができた。クイズの最中に学習者からポロっとこぼれた言葉を拾うことができていた。

○おにぎり作りに関して

おにぎりを作る活動が5日間における重要なアイスブレイクになった。コンビニの好きなおにぎりを話すという進行は流動的な学習を実現できた。

○アクシデント対応に関して

首から下げる名札の取り違いなどアクシデントがあった。対象者は分かっていたがそこだけ変えるのはあからさまであるため、おにぎり作りの前にといい名目で全員分を回収し、帰宅前に手作りの名札と交換して渡すという形で臨機応変に対応することができた。

○全体を通して

全体的に学習者一人一人をよく観察しながら進めることができ、全員が学習者をよく見てサポートに入れていたと感じる。

《反省点》

○時間に関して

時間が大幅に余ってしまった。時間にずれが生じたときに調整できるような案を考えておいた方がよかった。

○配置に関して

机を設置したことにより、学習者と実習生の間に距離があった。

○スライドの文字に関して

スライドの文字が小さい箇所があった。

○活動内容に関して

実習生が主体となりすぎている活動になってしまっていた部分がある為、動きのある活動を増



やすとよかった。

○学習者の発言量に関して

学習者の中で発言量に差が生まれてしまった。

【2日目 8/3(日)】 切り方、飾り切りの名前を知る。飾り切りに挑戦する。

料理で使う言葉を知る。

時間	活動内容	備考
9:30~9:50	【挨拶 (20分)】 ・名札のデコレーション ・今日の流れ	担当：谷口 https://x.gd/EYglG 【準備するもの】 ペン、デコレーション用品 【配置】 
9:50~10:20	【アイスブレイキング (30分)】 ・デコレーションした名札の紹介 ・2人ペア分け(切り方クイズ用) →同じカードを見つける (同じカードの人とペア) 実習生がカードを配る ・切り方クイズ 全6問 →選択問題 30秒、記述 1分	【配置】  担当：谷口 【使用するもの】 ・スライド https://x.gd/TafnG ・ホワイトボード ・ホワイトボード用ペン
10:20~10:30	【休憩 10分】	・野菜を切る動画流しておく
10:30~11:00	【切り方、飾り切りを学ぶ(30分)】 ①普段の調理で使う切り方の導入 ②普段の調理で使う切り方の練習	担当：谷口 【準備するもの】 ・スライド

	<p>～シルエットクイズ～</p> <p>切った野菜の写真から切り方の名前を答える。</p> <p>③名前と切り方が一致しているもの導入 例) 半月切り</p> <p>④切り方の名前神経衰弱</p> <p>⑤飾り切り導入</p>	<p>https://x.gd/TtPiT</p> <p>・④のワークシート</p> <p>https://x.gd/pXQQI</p>
11:00~11:40	<p>【飾り切りの体験 (40分)】</p> <p>初級：蛇、ハート</p> <p>中級：蝶</p> <p>上級：ペンギン</p>	<p>説明：谷口、実践：浅田</p> <p>https://x.gd/rEmar</p> <p>【使用するもの】</p> <p>・包丁、まな板、かまぼこ ゴマ、手袋 ウエットティッシュ</p>
11:40~11:50	【休憩 10分】	<p>・飾り切りの動画流しておく</p>
11:50~12:10	<p>【料理の言葉を学ぶ】 (20分)</p> <p>焼く、揚げる、煮る、茹でる、炒める 蒸す、沸かす、沸騰させる</p> <p>①料理動画の視聴 →「どうやって作っていましたか？」と質問</p> <p>②料理の言葉を知る</p> <p>③料理のジェスチャーゲーム</p> <p>④空欄補充アクティビティ (まとめ)</p>	<p>担当：浅田</p> <p>【使用するもの】</p> <p>スライド</p> <p>https://x.gd/NUltM</p> <p>BGM</p> <p>・スーパマリオ ・あつまれどうぶつの森</p> <p>【配布プリント】</p> <p>https://x.gd/L06XT</p>
12:10~12:30	<p>【終わりの挨拶 (20分)</p> <p>・感想、質問、明日の確認</p>	<p>担当：浅田</p> <p>スライド</p> <p>https://x.gd/NUltM</p> <p>・明日の確認で吉祥寺へ行く手段も確認</p>

《改善した点》

○時間に関して

飾り切りで時間調整を行った。その結果、前半は少し巻いていたが、最終的には時間通りに終わらせることができた。

○配置に関して

机を無くし椅子の配置を半円にすることでより話しやすい雰囲気作りをした。また、学習者の

周りを実習生が動くのではなく、間に入って座ることで距離を縮めた。

○文字に関して

文字のサイズを64ポイントにし、太さや色で強調することで見やすくした。

○活動内容に関して

ジェスチャーゲームを入れたり神経衰弱をしたりすることでゲーム性をもたせ、一方的なものにならないようにした。当初の教案では、学習者に順番に発言してもらう計画を立てていたが、学習内容自体は変えずに当てはめゲームを用いる形に変更した。

○学習者の発言量に関して

カードを配ってペア分けをする方法を用いた。配布時に学習者に気づかれないよう、結果を細工し同性同士かつ日本語レベルを調整したペアを作った。

《良かった点》

ペアを近くにいる学習者同士で組むのではなく、意図的に操作して組んだ為、レベルを調整でき、学習者間のコミュニケーションが活発になった。ペアワークにしたことで、学習者同士が固まることなく、比較的満遍なく交流できていたように感じる。

手先の器用な学習者が多く、かまぼこの飾り切り活動が盛り上がった。

《反省点》

○中国語の使用に関して

学習者同士の会話が中国語になり、中国語での会話が増えすぎてしまった部分がある。

○スライドに関して

カタカナにルビを付けるか、漢字には全てルビをつけるか、などルビのふり方に統一性が無かった。スライドは「ます系」にするなどの統一性が必要だった。また、動画を見る際に全画面表示にしなかったが、全画面表示にした方が周りの情報が無くなる為、動画に集中でき、画面が大きいくことで見やすくもなった。

スライドで、ひらがなを多用していたが、中国語話者が大半だったので、あえて漢字にした方が読みやすい部分もあった。

【3日目 8/4(月)】 お弁当のおかずについての知識を深める。

時間	活動内容	備考
9:30~9:35	【挨拶 (5分)】 ・今日の流れ	担当：柏崎 スライド： 教育実習_3日目.pptx
9:35~9:55	【アイスブレイキング (20分)】 ・グループ分け ・おかずビンゴ	担当：柏崎 スライド： 教育実習_3日目.pptx 【使用するもの】 ・黒板かホワイトボード ・ビンゴの紙

		教育実習_ビンゴカード.docx ・筆記用具、数字カード
9:55~10:05	【お弁当について (10分)】 吉祥寺散策前の導入 〈ミニゲーム〉 ・「市販」と「手作り」お弁当の違いは？ 分類してみよう！ 〈説明〉 ・「市販」のお弁当の特徴 ・「手作り」のお弁当の特徴	担当：柏崎 スライド： 教育実習_3日目.pptx 【使用するもの】 ・ペン ・「お弁当」の写真 ・手持ちホワイトボード
10:05~10:15	【休憩 10分】	
10:15~11:00	【キャラ弁について (45分)】 〈クイズ (15分)〉 ・キャラ弁の作る工程での早押し (5問) ・キャラ弁用の道具の紹介 〈実践 (30分)〉 ・キャラ弁を作ってみよう！(簡易版)	担当：柏崎 スライド： 教育実習_3日目.pptx 【使用するもの】 ・まな板、キャラ弁用グッズ 爪楊枝、割り箸、容器 パックご飯×15 海苔、ハム、マヨネーズ、お揚げ ご飯に色を付けるもの、手袋 除菌シート
11:00~11:10	【休憩 10分】	移動の為の準備、片付け
11:10~	【おかずを見に行く】 1番美味しそう なものを見つける ○グループ分け ①引率：高林 (徒歩希望) 行き先:オリジン&ダイソー ②引率：谷口 行き先:おむすび権兵衛&ダイソー ③引率：吉田&柏崎 行き先:SEIYU&セリア ④引率：浅田 行き先:ごちそう焼むすびおにまる &CanDo	場所：吉祥寺 ・東女生は各グループに1人配置 ・残りの1人はトラブル対応要員 (連絡係)としてフリー ↑1グループ東女生2人配置の可能性もあり ・一番美味しそうなものを見つけ てもらおう (4日目アイスブレイキ ングに向けて) ・撮影は東女生が行う

	移動 徒歩 (30分) バス(8分)	
~12:30	【終わりの挨拶】 各グループ現地で行う	グループごとに現地解散

《改善した点》

今までの活動で分かった学習者の興味関心に合わせて、キャラ弁クイズやキャラ弁作りなどの新しい活動を加えた。

《良かった点》

1日目、2日目に学んだことの振り返りを取り入れつつ、反応を見ながら活動できた。雰囲気がかけてきたことで、学習者側から積極的に授業以外のことでも日本語で質問をしてくれるようになった。

吉祥寺散策の時間にアクシデント対応要員として、1人自由に動ける人を用意しておいたことで、急なスケジュール変更に対応することができた。

前日に吉祥寺へ向かう手段を聞いていたが、行く直前になって手段を変更する人が多発した。日本語レベルや交流関係を鑑みて事前にチーム分けは決めていた。しかし、当日の交流によって変化した交友関係が要因で手段を変更する人が多くいた為、その点を考慮してチームを急遽、再編成した。その上で、実習生の担当やルート変更も行った。

《反省点》

キャラクターの中国語名を知っていても、日本名を知らないということが起きてしまった為、中国語名と日本語名で異なることを予め、念頭に置くことによりスムーズな進行になった。また、キャラクターをイメージしやすくする為に中国語を載せておいてもよかった。

クイズの際に答えを先に口にしてしまう学習者もいた為、答えが分かった人から前に来てもらい耳打ちしてもらうという方法をとることで、その点は改善できた。しかし、そうすることで前に行くことがハードルになってしまうというところまでは対応できなかった。

【4日目 8/5(火)】味を表現する言葉を知る。お弁当の味を表現してみる。

レシピブックの構想を練る。

時間	活動内容	備考
9:30~9:35	【挨拶(5分)】 ・今日の流れ	担当：高林 「味を表現する言葉」日本語教育実習.pptx
9:35~9:55	【アイスブレイキング (20分)】 ・3日目に見たことについて話す	担当：高林
9:55~10:25	【味を表現する言葉を学ぶ】(30分)	担当：高林

	<ul style="list-style-type: none"> ・PPT を使いながら味の説明をする。 ・アキネーターゲームをする 	【使用するもの】 PPT
10:25~10:35	【休憩 10 分】	
10:35~11:15	【お弁当を見る&試食 (40 分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・お弁当、おかずの紹介 	担当:高林 【アレルギー対応】 <ul style="list-style-type: none"> ・リンゴ、桃 1 名 ・豚肉 1 名 ・果物全般 1 名 【準備するもの】 タルタルのり弁当、牛焼肉弁当 卵焼き 2 種類、きんぴら、箸 フォーク、皿
11:15~11:25	【休憩 10 分】	
11:25~12:25	【レシピブック作り開始】 (60 分)	担当：全員 【進捗目安】 <ul style="list-style-type: none"> ・書く内容決定（扱う食品）と材料まで ・テンプレ 教育実習_レシピブック .docx <ul style="list-style-type: none"> ・実習生のサンプル 教育実習_レシピブック基本のおにぎり .pdf
12:25~12:30	【終わりの挨拶 (5 分)】 感想、質問、明日の確認	担当：高林

《改善した点》

1 人で前に来て発表することに抵抗を感じる人もいる為、アイスブレイキングの発表を個人ではなく、グループにした。

レシピブック作成の時に、初日の反省点を踏まえて、机を使いつつもコの字型に配置し、その中に実習生が入る形にした。

時間が余ることや一方的な活動になることを防ぐために、新たに料理の言葉を使ったアキネータークイズを追加した。

《良かった点》

グループそれぞれ見学したお店が異なったが、アイスブレイキングで見たことを共有した為、

他のチームが何をしたのか全く分からないという状況を防ぐことができた。また、発表も一度近くの人と見たことを共有し、お店を見に行ったグループ全員で前に出て発表するという形にした為、一人で前に立つことのハードルを少し下げることができた。

活動の内容から机を使用する必要があったのだが、机があることで距離感が1日目は生まれてしまった為、机の配置を工夫し、学習者が質問しやすい環境にすることができた。

《反省点》

レシピブック作りの進みが遅い人と早い人でかなり差が生まれてしまった。

お弁当の試食では、タルタルソースなど説明をしなかった食材もあったが、学習者から近くの実習生へ「この食べ物は何か」という全体での説明を省いた質問が出ていた為、もう少し詳しく一品ずつ説明しながら、進めてもよかったかもしれない。また、甘い卵焼きとしょっぱい卵焼きについて、試食するのであれば、地域差などに触れてもよかった。

【5日目 8/6(水)】 レシピブックを完成させる。作成したレシピブックを発表する。

時間	活動内容	備考
9:30~9:40	【挨拶(10分)】 ・今日の流れ ・記念撮影(12:00 ごろ帰宅する人がいるため)	担当：吉田
9:40~10:55	【レシピブック作り】 ・レシピブックの表紙作成 ・2 個目のレシピブックか 1 個目の続き ・1 つ目が完成している人は表紙作りから ・1 つ目を作成途中の人は昨日の続きから。終わり次第、表紙作成 ・表紙の作成が終わったら、2 つ目に入るか、1 つ目のデコレーション 【休憩 10 分】	・参加者全員のものをまとめる ・完成形は参加者全員のレシピが載ったレシピブック 【内容】 表紙、目次、実習生の見本のレシピ、参加者のレシピ、切り方の名前、料理の言葉、味を表現する言葉、BINGO カード、実習期間の写真とメッセージ
10:55~11:35	【発表の順番決めゲーム(40分)】 ・料理の言葉かるた →実習期間で登場した言葉のカルタ ・1 位から好きな順番を選べる	ゲームの進行:吉田、浅田 コピー:柏崎、谷口、高林
11:35~11:45	【休憩 10 分】	

11:45~12:15	【発表 (30 分)】 ・完成したレシピブックを配布 ・作ったレシピブックの紹介 ・レシピブック作りの感想か 5 日間の感想	担当：柏崎
12:15~12:30	【終わりの挨拶(15分)】 ・東女生から感謝の言葉	担当:谷口

《改善した点》

レシピブックが早く終わりそうな人用の追加の作業を用意しておくことで、学習者間の進み具合の差に対応することができた。

5 日間で学んだことを復習できるかるたを作成し、実施することで今までに出てきた料理の言葉遊びながら総復習する時間を作ることができた。

《良かった点》

かるたをする際に 1 度目は実習生が読み手をしたがそれ以降は学習者から読み手を募り、学習者の主体性を意識することができた。

発表の時に椅子を円形に配置し、前に行かなくてもその場で発表できるようにした。

《反省点》

コピーに時間がかかってしまった。表紙、目次、学習者のレシピ、最後のページ以外は前日に作って印刷まで済ませておけば、もう少し余裕をもたせることができた。

8. 実習をふりかえって

実習開始前を振り返ると、学習者集めから比較的スムーズに行うことができた為、教案など具体的な内容に多く時間を割くことができたように感じる。限られた時間の中でも、お互いにスケジュールを調整し合いながら進めることができた。実習中は、実習生同士、困っているときには互いにフォローし合い、突発的な出来事にも臨機応変に対応することができた。さらに、休み時間を活用して学習者と積極的に会話し、アニメや好き嫌いのある食べ物といった興味・関心を知ることができたのは翌日の教案の内容を改善する上での大きな収穫となった。また、実習後にいただいたご指摘やアドバイスは、翌日には改善につなげるなど、柔軟に対応できたことも良かった点であると感じている。

9. 後輩のみなさんへ

なかなかグループ内で予定が合わず、全員で集まることは難しい為、直近の締切だけでなく、数ヵ月先の締切まで確実に確認し、かなり前からメンバーの予定を合わせておくの良いのではないかと思います。また、学習者の方はどんなことに興味があるのか想像し、そのニーズに合わせたようなテーマや、日本語学校ではあまりやらなさそうなことをテーマにするのも良いかもしれません。ニーズ、ターゲットを知るためにポスターの送り先を早めに知っておくことが重要な

ではないかと感じております。しかし、学習者のニーズも大切ではありますが、何よりも実習生側も楽しんで、興味を持って取り組めるテーマだとなお良いと思います。実習生の雰囲気も伝わる為、雰囲気作りも大切になってくるはずです。大変なこともあるとは思いますが、チームで協力しぜひ頑張ってください。

10. さいごに

最後にはなりましたが、2年次から授業を担当して下さり、実習中も助言をくださった松尾先生、ポスター作成や教案作りなど実習準備からサポートして下さった吉本先生、私たちの実習を支えて下さった日本語教員養成課程事務室の皆様、5日間の実習に参加して下さった学習者の皆様、ありがとうございました。多くの方にご協力いただいたことで実習を行うことができました。この場を借りて、皆様に感謝申し上げます。

◆ 夏野菜炒め ◆
「絵はがきづくり体験」

酒井悠希

曾根原瑠乃

高萩涼音

福世美穂子

松崎未奈

チーム 夏野菜炒め
(メンバー: 福世美穂子、松崎未奈、高萩涼音、曾根原瑠乃、酒井 悠希)

I. テーマ

絵はがきづくり体験

絵はがきをテーマに日本の夏の風物詩を学べるクラスを開催

II. 全体目標

- ・季語や風物詩を知る、覚える
- ・感謝の気持ちを日本語で表現できるようになる

参加者の目標	実習生の目標
感謝、季節の言葉を伝える言葉を知る 思い出を自分の言葉で伝えられるようになる お祭りを楽しみながら夏を体感し、絵はがき作りを通して言葉を学ぶ	感謝や季節など、目に見えないものの説明をできるようにする(準備する)

III. 学習者の概要(表1参照)

1. 対象レベル: 初級以上
2. 参加人数: 12名(男性6名 / 女性6名)

表1 学習者概要一覧

年齢	性別	出身国	所属	参加日
20	女	コロンビア	早稲田大学 国際教養学部	全日程
21	男	タイ	JET日本語学校	全日程
31	女	台湾	JET日本語学校	全日程
32	男	台湾	JET日本語学校	全日程
20	男	中国	JET日本語学校	全日程
29	女	中国	イーストウエスト日本語学校	全日程
38	女	台湾	イーストウエスト日本語学校	全日程
22	男	中国	LTC友の会	全日程
24	女	チリ	LTC友の会	3日目のみ
34	男	中国	LTC友の会	1日目と5日目のみ
36	女	中国	なし	全日程
37	男	中国	なし	1日目と2日目のみ

IV. 学習者募集からの流れ

4月	チーム分け チーム名決め チーム内担当者決め
5月	テーマ決定
6月	ポスター作成
7月	チームミーティング: 8(火), 10(木), 11(金), 14(月), 22(火), 24(木) 説明会: 17(木), 19(土), 21(月), 25(金), 28(月), 29(火)

	JET日本語学校にて宣伝:15(火) 新宿学校にて宣伝:18(金) LTC友の会にて宣伝:24(木) ポスター・教案作成
8月	事前準備:1(金) 実習:2(土)~6(水) ご飯会:7(木)
9月	実習報告書作成 実習報告会準備
10月	実習報告会:11(土) 9:00~12:00 実習報告書提出:31(金)締切

V. 5日間の活動概要

日付	活動
8月2日(土)	自己紹介、アイスブレイキング(名札交換ゲーム)、言葉カード探し、日本と海外の祭りの紹介、明日の予定の説明、振り返り
8月3日(日)	お祭り散策、盆踊り体験、振り返り
8月4日(月)	アイスブレイキング(ラジオ体操第一)、レクリエーション(自己紹介リレー、かるたで遊ぼう)、昨日の祭りの振り返り、紙づくり、かき氷づくり体験(休憩)、振り返り
8月5日(火)	アイスブレイキング(ラジオ体操第一)、レクリエーション(誕生日順並べ替えゲーム、私は何でしょう?)、日本の手紙紹介、絵はがきづくり、振り返り
8月6日(水)	アイスブレイキング(じゃんけん列車、右挙げて左挙げて、言うこと一緒やること一緒 / 反対)、絵はがき発表準備、発表、スイカ割り(休憩)、振り返り

VI. 各日の目標と具体的な活動内容・良かった点・反省点

【1日目 2025年8月2日(土)】

主担当:高萩涼音、酒井悠希

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・場に慣れる ・簡単な自己紹介をする ・レクを通して新しい言葉を知る ・風物詩を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイクに力を入れる。みんなが話しやすい環境づくりに努める。 ・紙のつくり方をわかりやすく説明する。

時間	活動内容	場所	備考
9:00~ 9:25	【入室対応(25分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・人数確認→名簿と照らし合わせる ・挨拶、体調確認などの簡単なやり取り 	正門	【高萩】【松崎】【福世】 正門で待つ。 <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻者(未到着者)がいる場合 ・大幅に遅れる場合 ▶先生が連れてくる

9:25～ 9:30	【移動(5分)】 参加費の集金	正門から6203へ	【高萩】【松崎】【福世】 全員揃ったら、時間を待たずに教室へ誘導。 【酒井】【曾根原】教室でスタンバイ ・200円を徴収する ・名簿と確認
9:30～ 10:00	【挨拶・自己紹介(15分)】 ・名刺作り...呼んでほしい名前を書く 《実習生》 ・名前 + 読んでほしい名前 ・東女で何を学んでいるか 《学習者》 ・名前 + 呼んでほしい名前 ・出身国 ・日本語を学んでどれくらいか ・普段何をしているか(学校？仕事？) 【名刺交換ゲーム(15分)】 ・ルール説明(5分) ・実践(10分) ・手元に自分の名刺が戻ってきたら、自分のネームホルダーにしまって、クリア！	6203	ファンリ:【高萩】 順番 【福世】→【松崎】→【高萩】→【曾根原】→【酒井】 (しおりの順番) 学習者さんも、指名 【名刺交換ゲーム】 ルール 教室を歩いて、出会った人と自己紹介しながら名刺を交換する。 「私の名前は○○です。趣味は○○をすることです。」 交換した名刺の人になって、次に出会った人に自己紹介をする。 それを繰り返して、自分のもとに名刺が帰ってきたらクリア。 自己紹介が合っていたら、大成功。
10:00～ 10:10	【10分休憩】	6203	【酒井】【高萩】 水分補給や、お手洗いの案内 【松崎】【福世】【曾根原】 お菓子、飲料の準備
10:10～ 10:20	【言葉カード探し(10分)】 ・説明	6203	ファンリ:【酒井】 ・3チームに分かれる(※) 【松崎】【福世】【曾根原】各班に入る ・季節の単語を書いたカードを、教室中に隠しておく(前日に完了) (EX: スイカ、風鈴、うちわ、雪だるま、桜、焼き芋、などなど) ・カードをたくさん探して集める ・ポイントを競う

			夏のカード→2点 春夏秋冬のカード→1点
10:20～ 10:30	【言葉カード探し(10分)】 ・チーム対抗	・6201 ・6202 ・6208 ・6203 前の廊下	【酒井】廊下で探す範囲の指示 【高萩】採点の準備 黒板を書く
10:30～ 11:00	【言葉カード探し(30分)】 ・採点 ・結果発表 →単語の確認 「風物詩」を学ぶ	6203	<u>ファシリ:</u> 【高萩】 ・黒板に集めたカードを季節ごとに貼る(付箋を貼っておく) ・カードに書かれている文字のアイテムについて解説をする →絵はがきの題材決めに繋げる ・「風物詩」というキーワードを知ってもらう
11:00～ 11:10	【10分休憩】	6203	【酒井】【高萩】 水分補給や、お手洗いの案内 【松崎】【福世】【曾根原】 お菓子の準備
11:10～ 11:45	【日本の文化と海外の文化(35分)】 ・イベント&祭り紹介 ・日本の祭りについて(8分) ・グループワーク(7分) ・海外の祭りについて(10分) ・地域のお祭り(10分)	6203	<u>ファシリ:</u> 【酒井】 ・日本の祭りについて(8分) 例:ねぶた祭り(青森県) ・グループワーク 言葉探しと同じチーム <u>ファシリ:</u> 【高萩】 ・出店紹介 焼きそば、りんご飴、綿菓子、ラムネ、射的、輪投げ、くじ引き、フランクフルト、ベビーカステラ、チョコバナナ
11:45～ 12:15	【祭りの紹介&明日の予定の説明(30分)】 ・出店の紹介 食べ物、ゲーム、浴衣 ・2日目の活動について ・4日目の活動準備(説明) ※備考欄参照	6203	<u>ファシリ:</u> 【松崎】 吉祥寺の祭りについて ・集合場所、持ち物の確認 ・予算の説明 詳しくは下見をしてから改めて連絡することを伝える
12:15～ 12:30	【振り返り(15分)】 ・感想共有	6203	<u>ファシリ:</u> 【松崎】 ・はがきを送りたい人の住所と正しい名前を確認しておくように伝える！

			・みんなで今日学んだことや、楽しかったことを話し合う。
--	--	--	-----------------------------

良かった点:

- ・教案通りの時間で、スムーズに進行できた。
- ・言葉探しカードの説明のとき、映像を使って言葉の説明ができた。
- ・ゲームと学習のバランスを学習者の方にほめてもらえた。
- ・言葉カードやスライドなど、準備を入念にできていた。
- ・内装が明るかった。
- ・できるだけ全員が会話をし、これから5日間を一緒に過ごす仲間として仲を深められたらということを目標に構成したので、それを実現できた。

反省点:

- ・話すのが早くなってしまうたり、初級向けではない語彙や文法を使ってしまう場面があり、授業に慣れていない悪い点が多々見られた。
- ・学習者が理解していなさそうなところの、フォロー・キャッチが足りなかった。

【2日目 2025年8月3日(日)】

主担当: 福世美穂子、松崎未奈

学習者の目標	実習生の目標
絵はがきの題材を見つける 祭りを楽しむ	日本の夏祭りを教える 一緒に祭りを楽しむ

時間	活動内容	備考
12:00～15:00		3日目の事前準備
15:00～15:30		吉祥寺へ移動
15:30～16:00	吉祥寺駅集合 (北口 バスキンロビンズ横) 出欠確認 説明 ※備考欄参照	持ち物 ・日傘 / 帽子 ・飲み物 ・タオル / ハンカチ ファッション:【福世】 説明 カード配布 グループ分け(※) 会場での行動 ・絵はがきの題材に使える写真をたくさん撮るように伝える 解散までの流れ ・18:10までに東急百貨店へ移動
16:00～16:10	月窓寺へ移動	グループごと移動

16:10～17:30	お祭り散策 ・(表面)おまつりさがし ～ないものを見つけろ！～ (4×4) 例:くじびき、ゆかた、等 ・(裏面)写真ミッション(6つ) ・グループの集合写真 ・盆踊りを踊っている写真 ・好きな屋台の写真 ・きれいな色の写真 ・やぐらの前で写真を撮ろう	こまめに休憩を取ること！ 目安:30分に1回程度 グループごとに行動 1日目に出てきた単語等を用いたカード(1人1枚) ・きんぎょすくい ・りんご飴 ・チョコバナナ
17:30～18:00	盆踊り体験	一旦集合する 盆踊り大会参加
18:00～18:10	各グループでお祭りを楽しみ次第、東急百貨店屋上へ移動	遅くとも18:10までに移動完了
18:10～18:30	グループごとの振り返り@東急百貨店屋上	写真の共有 カードの答え合わせ
18:30～18:50	全体での振り返り@東急百貨店屋上	<u>ファシリ:</u> 【松崎】 振り返りと翌日の連絡 (明日は動きやすい服装でくること！最悪ぬれても大丈夫な服装) 宛名住所の連絡
18:50～19:00	吉祥寺駅へ移動 現地解散	

良かった点:

- ・夏祭りの屋台を巡り飲食物の実食やゲームなどを通して多くの体験を行うことができた。
- ・盆踊りでは振り付けが分かりやすく、練習せずとも見よう見まねで踊ることができ、楽しんで参加していた。
- ・4～5名程度の少人数グループで行動したため、実習生が状況を見ながら休憩や見学のタイミングを柔軟に判断できた。
- ・前日に実習生のみで会場を下見し、屋台の種類や価格を確認して、必要な金額を参加者に事前共有した。「お祭り探し」や「写真ミッション」などの独自ワークシートを作成し、主体的な活動を促した。
- ・休憩場所を確保し、その場で振り返りを行うなど、学びの要素を取り入れた有意義な一日となった。

反省点:

- ・5人ほどの少数グループの中でも、屋台に積極的に並びさまざまな食べ物やゲームを体験しようとする参加者がいる一方で、「自分はあまりお金を使いたくない」と控えめな姿勢を見せ遠慮する参加者も見られた。

→各参加者の意欲の違いに配慮しながらグループ全体の行動を調整することが難しかった。

【3日目 2025年8月4日(月)】

主担当: 曾根原瑠乃、高萩涼音

参加者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・祭りの思い出を日本語で話せるようになる ・紙づくりを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙づくりの進行をスムーズに行えるようにする ・話しやすい雰囲気づくりをする

時間	活動内容	場所	備考
9:00～ 9:25	【入室対応(25分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・人数確認→名簿と照らし合わせる ・挨拶、体調確認などの簡単なやり取り 	正門	【酒井】【松崎】【福世】 正門で待つ <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻者(未到着者)がいる場合 ・大幅に遅れる場合 ▶先生が連れてくる
9:25～ 9:30	【移動(5分)】	正門から 6203へ	【酒井】【松崎】【福世】 来た方を教室へ案内 【高萩】【曾根原】 教室でスタンバイ
9:30～ 9:45	【アイスブレイキング(15分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・シールを貼る 	6203	ファシリ:【曾根原】 ラジオ体操の説明(2分) ラジオ体操(3分) カードとシールの配布
9:45～ 10:05	【レクリエーション(20分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・チーム分けの発表 ・自己紹介リレー 《ルール》 ①好きな色と名前を言う 例: <u>青色</u> が好きな <u>るり</u> です ②隣の人の紹介と自分の自己紹介をつなげて言う 例: <u>青色</u> が好きな <u>るり</u> の隣の、 <u>ピンク</u> が好きな <u>すー</u> です ③②を繰り返して最初の人に戻る ④最初の人全員が全員の台詞と自分の自己紹介を言えたら終了 例: <u>青色</u> が好きな <u>るり</u> の隣の、 <u>ピンク</u> が好きな <u>すー</u> の隣の (省略) <u>青色</u> が好きな <u>るり</u> です <ul style="list-style-type: none"> ・かるたで遊ぼう 《ルール》 ①読み手がイラストカード(1日目に使用したもの)の単語を言う ②読み上げられたイラストカードの単語をとる	6203	ファシリ:【曾根原】 3チームに分かれる(※1) 各チーム(4名程度)で行う 各チーム(4名程度)で行う 読み手:東女生 1回だけでなく数回繰り返す
10:05～ 10:25	【昨日の祭りの振り返り、感想共有(20分)】 <ul style="list-style-type: none"> ・お祭りカードの答合せ 	6203	ファシリ:【松崎】 3チームに分かれる

	(A)きんぎょすくい (B)りんごあめ (C)チョコバナナ ・2日目に撮った写真を見る		スライドで写真を映す
10:25～ 10:35	【10分休憩】	6203	【曾根原】【高萩】 水分補給や、お手洗いの案内 【松崎】【福世】【酒井】 お菓子、飲料の案内
10:35～ 11:45	【紙作り】 ①大まかに手順説明 & お手本として 実践(20分) ②実際に作成(50分) チームごと(※3) ※ 片付けの時間含む	6202	ファシリ:【高萩】 ・晴れていたら外に干したい メンバー全員サポートに入る 早く作り終わったら、2枚目3枚目を作って良い 11:25頃～ 裏でかき氷準備 【福世】かき氷機のセッティング 【松崎】ミニストップへ氷(2kg)を 買いに行く
11:45～ 12:10	【かき氷を作って食べる (25分休憩)】	6203	必要なもの: かき氷機、氷、容器、 シロップ、スプーン、 ゴミ袋、ティッシュ
12:10～ 12:30	【振り返り(20分)】 ・チーム内(※3)で一人ずつ感想を共有する ・全体で各チームの感想を共有する	6203	ファシリ:【曾根原】 みんなで今日学んだことや、楽しかったことを話し合う 全体共有の代表者はなるべく参加者の方に担当してもらう

良かった点:

- ・この活動に初めて参加する方もいたが、ほかの参加者の方とも馴染めていた。
- ・紙づくりで時間が余った人どうして共同作業をして一つの紙を追加で作ることができた。
- ・かき氷づくり体験の準備と紙づくりを同時進行できた。
- ・あとから先生に指摘されて気が付いたが、紙作りでは「説明をしながら一緒に行動をする」という、難易度の少し高い授業を行っていた。しかし、そこについてこれない人が出ないように学生側も気を配ったことはもちろんだが、学習者の方同士でも協力して紙づくり体験をしており、みんなが楽しく作業を進められた。

反省点:

- ・参加者が紙作りやかき氷作り等のイベントに集中していたため、日本語の学習ができたという感想が少なかった。
- ・この活動に初めて参加する方のサポートを知り合いの参加者の方などにお任せしてしまった。
- ・作った後の紙を乾かす作業を暑い中、中庭で行っていた。もう少しいい手順があったかもしれない。

【4日目 2025年8月5日(火)】

主担当: 福世美穂子、酒井悠希

学習者の目標	実習生の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・はがきの書き方を知る ・絵はがきの完成を目指す 	<ul style="list-style-type: none"> ・はがきの書き方、文化を説明する ・はがきの文化についての説明は、学習者が飽きないように楽しく話す ・自国の文化についてもたくさん話してもらう機会をつくる

時間	活動内容	備考
9:00～ 9:25	【入室対応(25分)】 ・人数確認→名簿と照らし合わせる ・挨拶、体調確認などの簡単なやり取り	【高萩】【松崎】【曾根原】 正門で待つ。 ・遅刻者(未到着者)がいる場合 ・大幅に遅れる場合 ▶先生が連れてくる
9:25～ 9:30	【移動5分)】	【松崎】【高萩】【曾根原】 来た方を教室へ案内 【酒井】【福世】 教室でスタンバイ
9:30～ 10:00	【アイスブレイキング(10分)】 ラジオ体操第一 ・シールを貼る ・景品を受け取る (～9:40) 【レク】20分 ・誕生日順 並び替えゲーム(5分) (～9:45) ・私は何でしょう？(15分) (～10:00)	ファシリ:【福世】 ラジオ体操カードにシールを貼り、3日目と4日目のラジオ体操に参加したら景品 (4日目に参加できない場合、5日目に無断欠席しなければ景品を渡す) 【酒井】【松崎】【曾根原】 シールを配る 【高萩】 景品を渡す 誕生日が近い人の誕生日を祝う 誕生日順に並んで近くの人とチーム(4人ずつ)になる 【高萩】【松崎】【曾根原】 各チーム内でファシリ 【酒井】【福世】 見回り
10:00～ 10:10	【休憩(10分)】	【福世】【酒井】 水分補給や、お手洗いの案内

		【松崎】【高萩】【曾根原】 お菓子、飲料の案内
10:10～ 10:40	<p>【日本の手紙を紹介】(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・季節ごとの六種類 ・切手、お年玉付き年賀状について <p>【はがきの書き方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宛名、住所の書き方 ・書く練習(宛名) (～10:25) <p>【海外の手紙の文化について共有】(15分)</p> <p>皆さんの国ではどんな時に手紙を書きますか</p>	<p>ファシリ:【酒井】</p> <p>3チームに分かれる(※)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テンプレートのお手本用意(ありがとう等) <p>※送りたい人の宛名を確認しておいてもらう!</p> <p>年賀状、寒中見舞い、余寒見舞い、暑中見舞い、残暑見舞い、喪中欠礼</p>
10:40～ 10:50	【休憩(10分)】	<p>【福世】【酒井】</p> <p>水分補給や、お手洗いの案内</p> <p>【松崎】【高萩】【曾根原】</p> <p>お菓子、飲料の案内</p>
10:50～ 12:15	<p>【絵はがき作成(1時間25分)】</p> <p>ワークシートに明日の発表メモとして以下の2つを記入する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな人に送りたいですか？ どんなきもちを伝えたいですか？ ・どんな物をかきたいですか？ 	<p>ファシリ:【福世】</p> <p>送りたい人の住所、自分の住所は事前に確認しておいてもらう</p> <p>《用意するもの》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はがき ・ペン(たくさん) ・クレヨン ・絵の具 ・コピック <p>ワークシート配布</p>
12:15～ 12:30	<p>【振り返り(30分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感想共有 <p>写真撮影</p>	<p>ファシリ:【酒井】</p> <p>みんなで今日学んだことや、楽しかったことを話し合う。</p>

良かった点:

・ゲーム中に言葉の意味を再確認したり、以前の活動を思い出す場面も見られ、言葉の定着が図られていた。

- ・絵はがき作成中には「どうぶつの森」のBGMを流し、穏やかで和やかな雰囲気の中で作業ができた。
- ・BGM中の動物の鳴き声に反応して会話が生まれるなど、自然な交流が生じた。
- ・切手やはがきの実物を事前に用意したことで、具体的なイメージを持って活動に取り組むことができた。

反省点:

- ・手紙とはがきの違いについての説明は難しく、スライドや実物を用いてできる限り丁寧に説明を行ったものの、参加者が十分に理解できていたかは確認が難しかった。
- ・はがきの書き方を説明する際、予定時間を気にするあまり早口になってしまい、内容が十分に伝わらなかった可能性がある。

【5日目 2025年8月6日(水)】

主担当: 曾根原瑠乃、松崎未奈

学習者の目標	実習生の目標
みんなの絵はがきを共有して、いいね！を送りあう	5日間の締めくくりをする

時間	活動内容	備考
9:00～ 9:25	【入室対応(25分)】 ・人数確認→名簿と照らし合わせる ・挨拶、体調確認などの簡単なやり取り	【高萩】【酒井】【福世】 正門で待つ。 ・遅刻者(未到着者)がいる場合 ・大幅に遅れる場合 ▶先生が連れてくる
9:25～ 9:30	【移動(5分)】	【高萩】【酒井】【福世】 来た方を教室へ案内 【松崎】【曾根原】 教室でスタンバイ
9:30～ 10:00	【アイスブレイキング(30分)】 ・じゃんけん列車(10分) 一つの列車につながるまでじゃんけんをする ～9:40 ・右挙げて左挙げて(10分) ～9:50 ・言うこと一緒やること一緒、反対(10分) ～10:00	ファミリ:【曾根原】 東女生5人で一回実践する 以下の言葉を確認しながらゲームをする ・右、左 ・上げる、下げる ・上げない、下げない 以下の言葉を確認しながらゲームをする 右、左、前、後ろ、上、下

10:00～ 10:10	【休憩(10分)】	【曾根原】【松崎】 水分補給や、お手洗いの案内 【高萩】【福世】【酒井】 お菓子、飲料の案内
10:10～ 10:50	【絵はがき発表準備(40分)】 ○4日目に絵はがきを描ききれなかった人 ・絵はがきの完成を目指す ・ワークシートに発表メモとして以下の2つを記入する ・どんな人に送りたいですか？ どんなきもちを伝えたいですか？ ・どんな物をかきたいですか？ ○絵はがきが完成している人、複数枚書いた人 ・絵はがき1枚ずつの発表メモを書く ・宛名書き	ファシリ:【松崎】 チーム分け(※) 絵はがきを描ききれしていない 人と完成している人、複数枚書 いた人それぞれに指示が伝わ るように説明する 宛名書きをしたい人のサポート をする
10:50～ 11:20	【絵はがき発表(30分)】 一人一枚ずつ作った絵はがきについて発表をする ・誰に書いたものか ・どんな気持ちを込めたか ・何をかいたか	ファシリ:【松崎】 ・椅子を円形に並べる ・絵はがきを手にもって、一枚 ずつ発表をする
11:20～ 12:00	【スイカ割り&休憩(40分)】	ファシリ:【曾根原】 必要なもの: ブルーシート、スイカ、棒、タオ ル、目隠し、汚れても良い服 装、ゴミ袋、包丁、まな板、取り 皿(人数分)、ティッシュ
12:00～ 12:30	【全体の振り返り(30分)】 ・感想共有 ・2日目と4日目に撮った写真の授与 ・集合写真を撮る	ファシリ:【松崎】 みんなで今日学んだことや、楽 しかったことを話し合う。

良かった点:

- ・「じゃんけん列車」、「右挙げて左挙げて」、「言うこと一緒やること一緒 / 反対」を実施。グループが違っ
てあまり話す機会がなかった人とも接する機会ができた。
- ・4日目に絵はがきを描ききれなかった人、まだ描きたい人もいたため、絵はがき作成の時間を追加で
とった。絵の具などの片付けに時間のかかる画材を無くしたことで、スムーズに次の活動に移ることがで
きた。
- ・全体発表の際、椅子を円状にしたことで、全員が全員の顔を見ながら発表することができた。絵はがき
を誰にどんな思いを込めたのかを自分の言葉で表現することができていた。

反省点:

- ・季節の挨拶(暑中見舞い申し上げます等)の言葉の意味をあまり理解できていなかったという人がいた。
- ・振り返りの時間が長くなり、終了時間が少し遅れてしまった。

Ⅶ. まとめ(○良かった点 / △反省点 / →学んだこと)

1. 全体目標に関して

○日本語学習と体験を組み合わせることで、学習者が楽しみながら自然に言葉に触れ、使うことができた。体験を通じた日本語学習は、参加者の記憶に残りやすく、学習意欲を高められたと考えている。
△活動の種類が多く、時間配分や準備がやや慌ただしくなった場面もあった。
→結果として教案に書かれたスケジュール通りにスムーズに活動が進む日が多かったが、予期しないことが起こったときうまく対応し、活動中の参加者の様子に合わせて柔軟に調整する必要があると感じた。

2. 授業準備に関して

○事前に役割分担を明確にし、授業スライドや道具を用意しておいたことで、当日の進行がスムーズに行えた。ワークシートや言葉カード、制作材料など、参加者が手を動かして学べる準備を整えられた点も良かった。また、前日に参加者向けの連絡を必ず行ったことで、当日の流れや持ち物などを事前に確認でき、参加者が感じる不安を軽減できた点も良かった。
△画材の準備が直前すぎて間に合うか不安だった。予算を多く使いすぎた。
→準備段階での細やかな確認と、状況に応じた代替案の用意が重要であると学んだ。特に、複数人で協働する際には情報共有を徹底することの大切さを実感した。

3. 授業進行に関して

○スケジュールが大幅に狂うことはなく、予定時間ぴったりに進む日もあり、教案の時間配分も良かった。
△説明に時間を要したり、進行のペースが速くなってしまったりする場面があった。
→焦らず進行役が全体を見ながら柔軟に対応すること、また参加者の理解度を確認しつつテンポを調整することが必要だと感じた。

4. 学習者の日本語でのコミュニケーションに関して

○アイスブレイキングやグループ活動を通して、参加者同士が自然に交流できる雰囲気をつくることができた。活動を通じて、日本語を使って自分の考えや感想を伝える機会が多くあり、参加者の発話量が増えた。特に絵はがき発表会では、「誰に・どんな気持ちを伝えたいか」を自分の言葉で表現しようとする姿が見られた。
△日本語レベルに差がある参加者同士が対話する場面では、発言が少なくなる参加者もおり、フォローの仕方に工夫が必要だった。
→日本語を「学ぶ言語」から「使う言語」に変えるためには、安心して話せる場づくりが不可欠であると学んだ。学習者のペースを尊重しながら、自然なコミュニケーションを促す工夫を今後も意識したい。

Ⅷ. 実習期間の様子

《写真の説明》

1段目左:【2日目】集合写真

1段目右:【2日目】吉祥寺の夏祭り

2段目左・中央:【3日目】紙作り

2段目右:【3日目】かき氷作り体験

3段目左:【1日目】言葉カード探しの採点結果

3段目右・4段目左:【5日目】スイカ割り

4段目右:【5日目】集合写真



◆ ビタミンC ◆
「太鼓の名人になろう！」

飯田和々実

鈴木美桜

友田愛

西咲良

松本愛花

横田穂乃嘉

日本語教育実習報告書 「太鼓の名人になろう！」

学内実習 ビタミンCチーム

k22f2003 飯田和々実 k22h2069 鈴木美桜 k22e1139 横田穂乃嘉

k22h2084 友田愛 k22g2057 西咲良 k22h2119 松本愛花

◎学習者募集から実習開始までの流れ

ポスターを制作し、本学の近隣の日本語学校等にポスターを送った。ポスターに応募用の Google フォームのQRコードを添付した。

◎実習の進め方

2025年8月2日(土) 1日目

目標:学習者との距離を縮める、学習者が参加しやすい雰囲気を作る

内容:自己紹介、アイスブレイク、世界の太鼓について学ぶ

時間	内容	メンバーの動き	学習者の動き
～9:00	◎準備	教室に到着した学習者を案内し、イスに座って待機してもらう 出欠確認	
9:00～9:30 (30分)	◎名札作り (担当者:鈴木、横田) 紙に名前を書いて、名札を作ってもらよう指示する	東女生の見本として自分たちのも作っておく	教室到着後、名札づくりの説明を聞く→作成 分からなかったら質問

<p>9:30～9:45 (15分)</p>	<p>◎自己紹介 (担当:鈴木、横田)</p> <p>①名前 ②ニックネーム ③出身 ④趣味、好きなこと ⑤好きな食べもの</p>	<p>自己紹介</p>	<p>自己紹介</p> <p>円になって椅子に座り、お互いの顔が見えるようにする</p>
<p>9:45～10:15 (30分)</p>	<p><アイスブレイク> ◎椅子取りゲーム (担当者:飯田、友田)</p> <p>学習者にゲームのルールを説明する→東女生がお手本を見せる</p> <p>実践する</p>	<p>イス取りゲームができる形に机とイスを動かす</p> <p>実演しながら説明</p> <p>一緒にゲームをやる</p>	<p>椅子取りゲームの位置に椅子を動かす</p> <p>説明を聞き、デモンストレーションを見る</p> <p>ゲームをする</p>
<p>10:15～10:25 (10分)</p>	<p>◎休憩</p>	<p>学習者にトイレの場所や飲み物の場所を伝える、案内する</p>	<p>休憩する</p>
<p>10:25～10:55 (30分)</p>	<p>◎太鼓について紹介 (担当者:西、友田)</p> <p>画面に映した楽器を当てるクイズをする</p> <p>楽器を使うときの言葉も紹介する(吹く、叩く、弾くなど)</p> <p>楽器について自由に話す時間を取る→共有</p> <p>日本の太鼓についての紹介</p> <p>スライドにて他国の太鼓紹介</p>	<p>楽器のスライドを見せる</p> <p>奏で方のスライドを見せる</p> <p>話し合いに参加する</p> <p>和太鼓の写真を見せる</p> <p>色々な太鼓の写真を見</p>	<p>クイズに参加する</p> <p>話し合いに参加する→共有</p>

	太鼓について自由に話す	せる	話し合いに参加する →共有
10:55～11:05 (10分)	休憩		
11:05～11:35 (30分)	<p>◎楽器にまつわるゲーム (担当者:松本、鈴木)</p> <p>①リズムゲーム リズムゲームを説明する →最初に東女生だけで実演→実際にやってみる</p> <p>②楽器の音あてクイズ パソコンを使って音を流し、当ててもらおう</p> <p>③名前呼びゲーム 名前を覚えるためのゲーム ルールを説明する →東女生だけで実演→実践</p> <p>④リズム伝言ゲーム 前の人が叩いた音をマネして叩き、自分のリズムを追加していく ルールを説明する →東女生だけで実演→実践</p> <p>⑤強弱伝言ゲーム 前の人より大きい(小さい)声を出して言葉を繋げる ルールを説明する(成功パターンと失敗パターンをそれぞれ説明する) →東女生だけで実演→実践</p>	<p>説明の担当者は真ん中に立つ</p> <p>なるべく色々な人に当たるように指名する 担当以外の東女生もクイズに参加</p> <p>説明の担当者は真ん中に立つ ゲームに参加</p> <p>説明の担当者は真ん中に立つ ゲームに参加</p> <p>説明の担当者は真ん中に立つ ゲームに参加</p>	<p>イスに座り、向かい合うように円になる</p> <p>ゲームに参加する</p> <p>クイズに参加する</p> <p>分からないことがあれば質問する ゲームに参加</p> <p>分からないことがあれば質問する ゲームに参加</p> <p>分からないことがあれば質問する ゲームに参加</p>

11:35～11:45 (10分)	◎振り返り・感想 (担当者:横田・鈴木) 振り返りを行う	学習者に「振り返りシート」を配布する 各自でドキュメントに感想・振り返りを記入する 感想発表	振り返りシートを記入 記入 感想発表
11:45～11:55 (10分)	◎事務連絡 (担当者:横田・鈴木) 明日やることの確認 不明点の有無を確認		分からないことがあれば聞く

○良かった点

- ・セッション以外の時間でも、実習が始まる前や休憩中に積極的に学習者とコミュニケーションを取ることができた。
- ・教室の隅にけん玉や折り紙を置いておいたところ、学習者に好評で、日本文化で盛り上がることもできた。

○反省点

- ・椅子に座る際に学生と学習者がまとまって座ってしまい、学習者のサポートが均等にできなくなってしまった。翌日以降、座り方の指示も行いたい。
- ・ゲームの要素が多く、日本語を学ぶというよりも楽しくイベントをするような内容になってしまった。
- ・想定していたよりも学習者のレベルが高く、学習者にとって実習内容が簡単なものとなってしまった。翌日以降、学習者のレベルに合った応用的な内容も入れられるよう、教案を修正した。

2025年8月3日(日) 2日目

目標:太鼓について理解を深める

内容:アイスブレイク、太鼓教室の導入

時間	内容	メンバーの動き	学習者の動き
～9:00	◎準備	教室に到着した学習者を案内し、イスに座	教室に到着次第、イスに座って待機

		って待機してもら 出欠確認	
9:00～9:15 (15分)	<アイスブレイク> ◎フルーツバスケット(担当者: 鈴木、横田) 学習者にルールを説明後、東 女生で実践 全員で始める	全員でひとつの円を 作る 東女生がお手本を見 せる	全員で椅子を丸くす る お手本を見る 教室内で実際に動く
9:15～9:45 (30分)	◎太鼓教室の導入① (担当:友田) 「太鼓教室で使う言葉を学ぶ」 【導入する言葉】 「打つ、叩く 強く、弱く、軽く 順番、一緒に ゆっくり、早く」 「ドン」、「カッ」 全員で両手を使って強く、弱く 等を表現 ドン、カッの導入の際には、おも ちゃ太鼓を使ってまず東女生 が実践 →全身体験 ◎太鼓を使ったことわざ 例:猿も木から落ちる、 太鼓判を押す	「強く」「弱く」などの旗 を準備 太鼓のおもちゃを準備 手拍子 太鼓のおもちゃを見せ ながら説明 東女生が見本を見せ る 学習者を順番に当て て叩いてもらう 少し難しい内容なの で、学習者が理解でき ているか確認しながら ゆっくり進める	当てられたら質問に 答える 手拍子 指名されたら太鼓を 叩く わからないことがあ れば、質問

9:45～10:00 (15分)	◎休憩	学習者にトイレの場所 や飲み物の場所を伝 え、案内	
10:00～10:30 (30分)	◎太鼓教室の導入② 「太鼓について知ろう」 (担当:飯田) 1,和太鼓についての説明 2,太鼓の部品の名前 バチ(棒) 面(皮)←牛の皮 びょう 胴 3,動物の身体の一部を使った 楽器の紹介 三線、ギター、バイオリンの弓、 三味線はそれぞれどんな動物 の身体の一部が使われている のか考える 配った紙に考えた答えを書い た後、周囲で話し合い、スライド を使って答え合わせ	スライドを見せ、棒で 当てはまる部分を指し ながら説明する。 クイズの紙とペンを学 習者に配る	・コの字型に並べた 椅子に座る 配った紙に答えを書 く、近くの人と話し合 う
10:30～10:40 (10分)	◎振り返り・感想 (担当者:西) ◎事務連絡 (担当者:松本) 明日やることの確認 不明点の有無を確認	学習者に「振り返りシ ート」を配布する 感想発表	振り返りシート記入 感想発表 予定の確認 分からないことがあ れば質問

10:40～10:50 (10分)	◎休憩		
10:50～11:00 (10分)	◎移動 教室を出て、東京女子大学前 のバス停に移動	バス停に案内	荷物を持ちバス停ま で移動
～11:06 (6分)	11:06→11:22 東京女子大学前→吉祥寺前バ ス停前到着	学習者の確認、案内	乗車
11:22～11:30 (8分)	ゲームセンター(プラサカプコ ン)まで徒歩で移動	移動	移動
11:30～11:50 (20分)	◎太鼓のゲーム (担当者:西、松本) 分からないことがないか聞く ゲームセンターで太鼓のゲーム		流れを理解 ゲームを行う
11:50～11:55 (5分)	吉祥寺駅前に集合 12:00 解散	明日の集合について 再度確認 不明点の有無確認 学校に戻る	集合後その場で解 散

○良かった点

- ・1日目の反省点を活かして、席に座る際は東女生と学習者が交互で座り、よりサポートしやすくなった。
- ・学びの時間を多くとったことで意見交換や話し合いを深められ、日本語を学ぶことの楽しさを共有できた。

○反省点

- ・スライドに載せた文や話し言葉が長くなり、強調したいところがわかりにくくなってしまった。
- ・発言する人にかたよりがあったため、グループで話し合い等をする場合は、もっと小さいグループにすることで、全員が発言しやすい環境をつくる。
- ・太鼓判を押すということわざは日本人でも普段使わないため、取り入れてよかったのかどうか。

2025年8月4日(月) 3日目

目標:太鼓を実際に体験する

内容:和太鼓の模範演技と体験

場所:井草地域区民センター

内容	メンバーの動き	学習者の動き
(東女生)荻窪駅北口に集合する 東女生とわかるようなプラカードを持って待機	丸の内線改札前(ホーム側)待機 →友田・鈴木 荻窪駅南口前 →横田・飯田 荻窪駅北口改札前 →松本・西 ○前日に、荻窪駅が西荻窪駅の1つ手前の駅であることを参加者と確認	
(参加者)荻窪駅北口に集合する	メンバーの確認、点呼	駅で集合 分からなかったら連絡
「井草地域区民センター」到着		共に行動
「杉並和太鼓の会」にて演奏見学・体験・演奏		共に行動
休憩	学習者の確認	水分補給、着替え
荻窪駅北口 到着、解散	メンバーの点呼・解散	現地で解散

○良かった点

- ・2日目までの活動で導入した「ドン」「カッ」といった言葉や、「バチ」「面」といった和太鼓の部位について理解した上で講師の方のお話を聞くことができた。
- ・学習者と東女生が混ざり、同じ目線で参加できた。
- ・学習者に対し、講師の方の言葉を理解できているかどうか確認しつつ進めることができた。

○反省点

- ・初めて聞く言葉や学習者にとって難しい言葉が出てきたときに、全員に対してフォローできなかった。

- ・太鼓の体験を単に楽しいだけで終わらせず、学びに繋げるための工夫ができればより良い。
- ・体験のなかにも学びの要素をもう少し入れることができれば良かった。

2025年8月5日(日) 4日目

目標:オノマトペを習得する

内容:アイスブレイク、太鼓教室の振り返り、オノマトペについて学ぶ

時間	内容	メンバーの動き	学習者の動き
～9:00	◎準備	<ul style="list-style-type: none"> ・学習者の案内 ・出欠確認 ・擬音語カードの用意 	
9:00～9:20 (20分)	◎アイスブレイク (担当者:西、松本) 「叩いて被ってじゃんけんぽん」のゲーム 東女生で見本を見せる 2グループに分かれてゲームをする	<p>2チームに分かれて1列になる(教壇に道具を用意する)</p> <p>分からないことがある か問いかけ→実践</p>	<p>説明を聞く</p> <p>見本を見る</p> <p>実践</p>
9:30～9:50 (20分)	◎太鼓教室の振り返り ・感想発表 (担当:友田、飯田) 4つの太鼓教室の動画を流して見せる 振り返りシート記入の時間を取る(10分間) →順番に発表	<p>学習者に「振り返りシート」とペンを配布する</p> <p>太鼓教室の動画を見せながら活動を振り返る</p> <p>発表する</p>	<p>振り返りシートを書く</p> <p>発表する</p>

9:50～10:10 (20分)	◎休憩	学習者にトイレの場所 や飲み物・お菓子の 場所を案内する	
10:10～10:45 (35分)	◎色々な演奏についての 紹介 長胴太鼓、篠笛、締太鼓 の言葉を導入する ① 太鼓演奏動画を見る ② お囃子動画を見る 動画を見た感想を近くの人 と話し合う →共有 「オーケストラ」の演奏につ いて オーケストラと太鼓の演奏 の比較を話し合う 「指揮者」の有無・役割に ついて	太鼓演奏動画を流す お囃子動画を流す 話し合う 話し合う	太鼓演奏動画を見る お囃子動画を見る 話し合う 話し合う
10:45～11:05 (20分)	◎休憩	学習者にトイレの場所 や飲み物・お菓子の 場所を案内する	
11:05～11:45 (40分)	◎オノマトペを学ぼう(擬音 語・擬態語) (担当者:横田、鈴木) 「擬音語」の導入 例:リンリン、シャカシャカ		

	<p>一話し合いー</p> <p>①皆さんの国に擬音語はありますか？</p> <p>②「カンカン」は何の擬音語だと思いますか？</p> <p>→共有</p> <p>擬音語の音の強さによる違いを話す 例:ぽつぽつ/ざーざー</p> <p>擬音語の聞こえ方による違いを話す 例:猫の鳴き声(みゃー、にゃー、みやおみやお など)</p> <p>2グループに分かれて擬音語ゲームをする (カードに書かれている擬音語を身近なものを使って表現する)</p> <p>「擬態語」の導入 例:ワクワク、ドキドキ、ふわふわ</p> <p>一話し合いー</p> <p>この擬態語は、どんな気持ちや様子を表しているでしょうか</p> <p>①とげとげ</p> <p>②つやつや</p> <p>③がたがた</p> <p>→共有</p> <p>◎マンガオノマトペクイズ</p>	<p>周囲の人と話し合う</p> <p>共有する</p> <p>擬音語カードに書かれている擬音語を身近なものを使って表現する</p> <p>学習者の補助</p> <p>話し合う</p> <p>共有する</p>	<p>周囲の人と話し合う</p> <p>共有する</p> <p>擬音語カードに書かれている擬音語を身近なものを使って表現する</p> <p>話し合う</p> <p>共有する</p>
--	--	--	--

	(担当者:横田、鈴木) 漫画のイラストの空欄にあてはまるオノマトペをクイズにする	クイズをしながら学習者の補助	クイズに回答する
11:45～11:55 (10分)	◎振り返り (担当者:飯田、友田) 振り返りシートを記入 →共有	振り返りシートの配布 感想を話す	振り返りシートを記入する 感想を話す
11:55～12:00 (5分)	◎事務連絡 明日やることの確認 不明点の確認		連絡事項を聞く 分からないことがあれば聞く

○良かった点

- ・休憩時間にも学習者とコミュニケーションを取り、仲を深めることができた。
- ・擬音語、擬態語、オノマトペの導入の際に一方通行ではなく学習者が発言をする機会を多くとることができた。
- ・太鼓教室の振り返りシートやクイズなどで日本語を紙に書くという作業を通じて新たな学びに繋げることができた。
- ・学習者と東女生の話す比率に気をつけることができた。

○反省点

- ・話し合いの時間を多くとったことで、そのグループが近くの人で固定されてしまう傾向にあった。そのため、もっとグループを変えたり移動したりしても良かったかもしれない。
- ・擬音語と擬態語の違いについて、両方ともを含む言葉もあるため学習者が混乱する場面があった。東女生側ももっと擬音語と擬態語の違いやその両方ともある言葉についての理解を深めておくべきであった。

2025年8月6日(日) 5日目

目標:擬音語を体系的に習得する、5日間のまとめ

内容:アイスブレイク、楽器・楽譜を作る、擬音語を使って全員で演奏、振り返り

時間	内容	メンバーの動き	学習者の動き
～9:00	◎準備	教室に到着した学習者を案内、椅子に座って待機してもらう	教室到着次第、待機
9:00～9:30 (30分)	◎アイスブレイク (担当者:鈴木、横田) これまでのアイスブレイクの中からやりたいものを選択 →実践 ・叩いて被ってじゃんけんぽん ・椅子取りゲーム	必要に応じて補助	分からないことがあれば質問
9:30～9:40 (10分)	◎楽器づくりの言葉の導入 (オノマトペ) (担当者:西、松本) 楽器づくりのときに使うオノマトペの導入 「ちよきちよき、ざくざく、ぺりぺり、びりびり、かちん」 動画を流して、擬態語か擬音語かを学習者に答えてもらう	動画を流す 学習者に問いかけ&疑問点を確認	動画を見る オノマトペを声に出す
9:40～10:10 (30分)	◎楽器作り(担当者:西、松本) 机にある材料でオリジナル楽器を作成 ①作った楽器に名前を付ける	材料を使って自由に楽器を作成	一緒に作る つくった楽器の名前、擬音語を発表

	<p>②作った楽器からどんな音が聞こえるか擬音語で表す →配った紙に記入 目的: 聞こえた音を言葉(擬音語)で表現</p>	<p>用意した楽器の見本を見せる ①②を順番に発表 →他の人にも何の音に聞こえるか問いかけ</p>	
10:10~10:20 (10分)	◎休憩	学習者にトイレの場所や飲み物・お菓子の場所を案内する	
10:20~11:10 (50分)	<p>◎楽譜作り (西・松本)</p> <p>3チームに分かれて楽譜作成&演奏</p> <p>東女生で見本を見せる</p> <p>チームで ①曲のタイトル ②曲のポイント、工夫したところを模造紙に書く</p>	<p>3チームに分かれる</p> <p>3日目に学んだ裏拍子(太鼓のリズム)を叩く人を決める</p> <p>発表・演奏 学習者の補助</p>	3チームに分かれる 発表・演奏
11:10~11:20 (10分)	<p>◎振り返り (担当者: 飯田、友田)</p> <p>シートに5日間の振り返り、感想を記入 発表</p>	<p>学習者に振り返りシートを配布する</p> <p>振り返りの共有</p>	<p>振り返りシートに感想を記入</p> <p>振り返りの共有</p>
11:30~12:00 (30分)	<p>◎自由時間 (飯田、友田)</p> <p>写真撮影、お菓子パーティー</p>	<p>写真撮影 お菓子パーティー</p>	<p>写真撮影 お菓子パーティー</p>
★時間が余ったら行う	◎和太鼓の作られ方+オノマトペ		

	作り方の動画を流す 動画の中のオノマトペをクイズ形式で出題	動画を見ながら説明する	動画を見る
--	--------------------------------------	-------------	-------

○良かった点

- ・擬音語を作りだし言葉にするという体験を通じて、擬音語への理解を深めることができた。
- ・楽器作り、楽器で擬音語を表現するという活動を通じて、擬音語に正解はなく、一人一人聞こえ方が異なってもよい、という導入の際の学びを活かすことができた。

○反省点

- ・楽器作りの言葉の導入、楽器作りともに時間配分の想定が難しく、計画していた時間に合わず臨機応変な対応が必要であった。

◎5日間のまとめ

5日間の実習を通して、学習者が日本語を使いながら積極的に交流し、学びを深める姿を見ることができた。特に「太鼓」や「オノマトペ」といった音をテーマとし、一貫性を持った活動を通して、言葉を体系的に学ぶことの楽しさを共有できたと感じる。日を重ねるごとに学習者の発言や笑顔が増え、教室全体に安心感と一体感が生まれていった。

また、太鼓体験やオノマトペの学習では、音やリズム、感覚的な表現を通じて日本語の奥深さや文化的背景にも触れてもらうことができた。一方で、学習者のレベルや理解度に合わせた活動構成、説明の速さ、時間配分、椅子の座り方など、教室づくりでの課題も多く見つかった。特に、想定外の進行や学習者の反応に応じて柔軟に対応する力の重要性を深く実感した。チームとしても、日々の振り返りを重ねながら役割を分担することで、よりよい教室づくりができた。協力し合いながら改善を積み重ねたことで、後半になるにつれて学習者が主体的に日本語を使う姿が見られ、学習者と学び合う姿勢を実現できた。

この5日間の実習を通して、学習者とともに学びをつくることの楽しさ、そして教える側としての責任や工夫の大切さを改めて感じた。

◆実習報告◆

学外実習
(フィールド実践 B・C)

●2025 年度 学外実習受け入れ機関●

実習受入先日本語教育機関

- ・株式会社 インターカルト日本語学校 東京都台東区台東 2-20-9
- ・学校法人 江副学園 新宿日本語学校 東京都新宿区高田馬場 2-9-7
- ・株式会社 ランゲージアカデミー 友国際文化学院 東京都新宿区百人町 2-20-17

実習期間

受入れ日本語教育機関	実習期間
インターカルト日本語学校	《短期》 9/8～9/19
新宿日本語学校	《長期》 5/15～6/12
友国際文化学院	《長期》 7/9～7/25 8/4～8/22 9/1～9/19

◆ インターカルト日本語学校 ◆

青島果南

大久保彩愛

田村碧彩

出口陽美佳

水迫里穂菜

1. インターカルト日本語学校について

インターカルト日本語学校は、1977年に設立された日本語学校である。秋葉原駅から徒歩17分、御徒町駅から徒歩14分の場所に位置している。学習者は現在400名以上在籍しており、漢字圏出身者が半分以上を占め、そのほかはアジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカなど、世界各国から学習者が日本語を学んでいる。

インターカルト日本語学校は、「CROSS CULTURAL COMMUNICATIONS (CCC: 人間同士が真に理解し合うために、生き方や価値観などすべてのものを含めた文化の違いを互いに理解し合いながら共存する)」を共通理念としている。実際の場面で使える日本語を習得すること、学習者自身が日本語を使って学びたいことを学べることを重要とし、学習者が前向きに授業に参加できる環境づくりを常に目指している。

2. 実習内容

実習期間は、2025年9月8日(月)から9月19日(金)で、そのうち土日祝日を除いた9日間参加した。実習内容は、主に以下の5つである。

1. ホームクラス、漢字クラスの授業見学
2. インターカルト日本語学校専任講師によるレクチャー
3. 目的別授業の参加、見学
4. ホームクラスでの教壇実習
5. スピーチ大会の見学

3. ホームクラスについて

「話す・聴く・読む・書く」の各能力を養うためのクラスであり、各自のレベルに合ったクラスを、1学期(約3か月間)を通して受講する。学習者のレベルによって初級クラスレベル1-2、中級クラスレベル3-4、中上級・上級クラスレベル5-10に分けられており、同じレベルの中でも更に細かくa、b、c…と分けられている。s,tクラスは初級クラスの中でも丁寧に進めているクラスである。ホームクラスの授業は1コマ50分で、出欠の確認、ウォーミングアップ、復習、宿題の答え合わせ、文型の導入、パターン練習、応用練習の順で基本的に構成されている。今回の実習では、初級クラスレベル2のクラスの中で実習生1名につき1クラスが割り当てられ、9日間見学をさせていただいた。最終日にはホームクラスで教壇実習を行った。以下、各自が担当したホームクラスの特徴である。

J2a について（田村）

学習者の国籍は、アメリカが6名、中国が5名、香港・ミャンマーが各2名、メキシコ・モンゴル・スウェーデン・イタリアが各1名の計19名だった。授業で積極的に発言をする学生に偏りはあるが、J2aクラスは既修者のクラスで、日本に留学をする前から日本語を学んでいた人が多いため、新しい文法を理解するのがスムーズな印象だった。英語を話せる学生が多く、休憩時間は英語でコミュニケーションを取っている様子が多くみられた。授業中、笑いが盛り上がる場面も多くクラス全体で仲の良い印象であった。

J2b について（出口）

学習者の国籍は、中国が5名、アメリカが3名、台湾・ミャンマー・モンゴル・ウズベキスタン・イタリアが各1名という構成だった。若い人が多かったが、最高は60代もいる個性豊かなクラスで、2025年の4月に来日したという学生が多かった。発言への積極性は人によって偏りがあったが、誰かが回答に困るとすぐに周りの人が助け船を出すような、温かい雰囲気の中で授業が行われていた。休み時間、中華圏の学生同士では、中国語で授業内容を確認する場面が見られたが、基本的には日本語でやり取りを行っていたように思われる。学習の目的は、進学や就職など様々であった。

J2c について（水迫）

学習者の国籍は、中国が8名、台湾が3名、カナダ・キプロス・ウズベキスタン・インド・イギリス、アメリカ、スウェーデンが各1名の合計18名のクラスであった。20代から40代と幅広い年代の学生がいた。授業中の積極的な発言には学生によって偏りがあったが、分からないところを先生に質問していたり、隣の席の人が助け合ったりしてあたたかい空気の中で授業が行われているのが印象的であった。休み時間は、中華圏の学生同士では中国語で話していた場面が見られたが、基本は日本語を使用してやりとりしている事が多くあった。

J2s について（大久保）

学習者の国籍は、中国が5名、アメリカ・台湾・モンゴル・イタリアが2名、タイ・ミャンマー・パキスタン・キプロス・ウズベキスタンが各1名の合計18名のクラスであった。休み時間には主に中国語と英語が飛び交っていたが、お菓子を分けながら日本語で話しかけてくださった学習者もたくさんいた。J2レベルのなかでも時間をかけて丁寧に学ぶクラスであり、間違いを恐れず積極的に発言をしていた。また先生の質問にうまく答えられなかったときには周りの学習者がフォローする場面が何度も見受けられ、クラス一丸となって日本語を学んでいると感じた。

J2tについて（青島）

J2tクラスは19名の学習者が在籍しており、およそ半数が漢字圏出身者であった。年齢層は10代から60代まで幅広く、和気藹々とした雰囲気を感じられた。教員のキューに対して積極的に返したり、分からないことがあるとすぐに質問するなど、意欲的に授業に参加していた。学習者たちは日本語の勉強について、文法が多く漢字の読み方も似ているので大変だが、日本人と会話できるようになるのが楽しいと話していた。休み時間では、中国語や英語、日本語を使用して楽しく会話していた。また、隣の席の人と語彙の勉強をし合うなど、お互いに助け合って学んでいた。

4. レクチャー

実習期間中に、3回レクチャーの時間をとっていただいた。以下ではレクチャーの時間についてまとめていく。

①目的別クラスについて

インターカルト日本語学校では、ホームクラスや漢字クラスのほかに目的別クラスが設置されていることが特徴である。その概要や種類、意義などについてレクチャーをしていただいた。目的別クラスはJ3レベルから履修が可能である。授業内容は試験・大学入試対策、会話、読解、日本文化（歴史、漢字、邦楽の歌詞、紙芝居など）というように幅広く、ひとりひとりの学習目的に合わせて自由に選択することができる。どのクラスでも言葉を学ぶだけではなく、考えを深め「使える日本語」を身につけることに重点を置いていた。

②日本語学校・業界について

加藤早苗校長先生より、日本語教育の現状と今後の展望、その重要性についてご講話をいただき、対話をした。あわせて、インターカルト日本語学校の特徴や教案作成時に留意すべき点など、日本語教育全般に関する具体的な示唆をいただいた。また、ご自身の日本語教師としてのキャリアについてもお話していただき、その豊富な人生経験が同校の教育方針や特色に深く反映されていることを知ることができた。特に、「日本語教育は現状に安住してはならず、人間もまた変化に対応できる柔軟性を備えた者が生き残る」という力強いメッセージは印象的であった。この言葉からは、日本語教育にとどまらず、加藤校長先生が重視されているチャレンジ精神の重要性を学ぶことができた。

③漢字クラスについて

インターカルト日本語学校では、漢字圏と非漢字圏で漢字クラスが分かれており、今回のレクチャーでは「非漢字圏」の漢字クラスについてレクチャーを受けた。非漢字圏の漢字クラスでは、「象形文字」「指事文字」「会意文字」「形声文字」といった『六書』による漢字の分類に基づいて、漢字をイメージで学んでいく。例えば「看」という漢字は、「会意文字」で「手」と「目」を組み合わせた漢字である。「看護師」や「看守」という単語に使われるように、「看」は、「手」をおでこにあてて「目」でよく見るというイメージという教え方をするそうだ。学習者が漢字を形としてだけでなく意味をもったものとして理解してもらうためには教師側もしっかり漢字について学ぶ必要があると感じた。

5. 目的別クラス

概要

インターカルト日本語学校には、3レベル以上の学生が、自身の興味や学習目的に合わせて履修することができる目的別クラスが設置されており、カリキュラムの特色の一つとなっている。学生は、第1回と第2回の授業を受けてから、登録するかどうか決めることができる。

クラスには、文法の復習やレベル別の読解や聴解、ディスカッション、作文のような特定の能力に特化したクラスに加え、「歌詞の世界」のように歌詞を通して読解を行うクラスや、「就活サポートプログラム」のような場面に特化したクラスもある。どれも多様な学びを通して、日本語を「使える」ようにするためのクラスになっている。実習期間には5つのクラスを見学および参加させていただいた。以下にクラスごとの詳細を記す。

ディスカッション

このクラスは、4~5人で一つのグループになり、授業の最初に示されるテーマに沿ってディスカッションを行う。3~4レベル（初級と中級の間）の学習者が参加していた。「グループ全員が発言をすること」と「単語ではなく文章で意見を言うこと」というルールでディスカッションを行う。ディスカッションのクラスだが、一番の目的は学習者に「会話をするのが楽しい！」と思ってもらうことであるため、ディスカッションのフォーマットを進めていくことは重要視していない。選択授業のため、発言に積極的な学生が多く会話を楽しんでいた。

参加した日のテーマは「外国に住むことの良いところ悪いところ」だった。特に印象に残った意見は、中国出身の学生が「日本は水溜まりの水がズボンにかかってもあまり汚れないので驚いた」というもので、よくSNSで日本の道はきれいだと話題になるが改めてそのことに気づかされる意見だった。

生と死と私たち 知る・話す

このクラスは、午前クラスで開講されているクラスで、知ること、話すことに重きをおいた授業になっている。テーマは授業回ごとに異なり、性、戦争、災害などから生死について考え、議論を行う。日本で生活する上で、災害、特に地震は避けられないことから、災害への備えについても重要視して扱っているとのことだった。

私たちが参加した日のテーマは「自殺」であった。最初に、「自殺」という言葉からイメージする言葉を、全員がホワイトボードに書き込んでいく。午前クラスは、中・上級クラスの学生が参加しているため、「現実逃避」や「孤独」など、日常会話であまり使用しない語彙も挙げられていた。なお漢字にルビがふられることはほとんどなかった。挙げた言葉についてひとりずつ話した後で、グループになり、テーマについて自由に話した。様々な国籍の学習者同士で話すことで、多角的にテーマについて考えることができた。グループで話したことを全体で共有した後は、統計資料などからクイズで問題について学習し、さらに語彙として「誤解」「迷信」「神話」「幻想」を学習した。学習者が考え、話すことで、対話を通して授業が進められていた。

聞いて話す

本クラスは、ラジオを聞いて内容を理解することと、扱ったテーマについて自由に話し合うことの2点を目的としていた。はじめに今回の内容のキーワードを紹介し、その意味を確認した。キーワードは「息を殺す」「験を担ぐ」「赤ちゃん言葉」の3つだった。キーワードの難易度は、それぞれの単語の意味は分かるが、慣用句の意味は分からないということを目指しているとのことだった。一度音声を再生し、各自聞き取ったことをメモし、クラス全体で登場人物や「いつ」「どこで」など聞き取った言葉を確認した。その後もう一度再生し、「誰が」「どのような目的で」「何をした」というあらすじを中心に、クラス全体で内容を共有した。学習者は、慣用句や登場人物の動作、目的、時間軸など細かいところまでよく理解していた。最後にペアを作り、テーマについて話し合った。今回のテーマは「自分のルール」であり、教育実習生も学習者とペアになって、自分自身に課しているルールや習慣について話し合った。

伝わるプレゼンテーション 紙芝居を使って

本クラスでは、学習者がプレゼンテーションスキルを身につけることを目的として授業が行われた。日本文化である紙芝居を教材として取り入れることで、独自性のある学習活動が展開されていた。授業においては、単にセリフを読むのではなく、学習者一人ひとりがそれぞれの役になりきって演じることが求められた。また、拍子木やインターカルト日本語学校オリジナルの紙芝居（ルビ付き、役をアイコンで示し読む箇所を明確化したもの）を使用し、「本物」に触れる経験が提供されていた。これらの活動を通じて、学習者は「見せ方」「聞かせ方」を意識した表現を学ぶとともに、学習者の個々の力を引き出すことが日本語教師の重要な役割であることを理解

する機会となった。

ビジネス会話 II

このクラスでは、敬語を用いてインタビューをすることを目的として授業が行われた。インタビューは学生で、私たち実習生 5 名と事務で働かれています方 1 名がインタビューとなった。インタビュー内容としては、「日本語教師をするうえで気を付けていること」「就職活動で工夫したこと」「アルバイトで気を付けていること」であった。学生の方々はインタビューをする際には、「よろしいでしょうか?」や「いらっしゃる」などの敬語を流暢に使用しており、更にインタビューが話している際には相槌をうち、発言を繰り返して言うといった丁寧なコミュニケーションをとっているのが印象的であった。敬語を使ってインタビューをするという授業により、丁寧な日本語の使い方が学習でき、身に付けることができる授業であった。

6. 漢字の授業

漢字クラスは、漢字圏出身の学生と非漢字圏出身の学生とで、分けて編成されている。初級クラスでは、毎日 1 コマの授業が行われ、中級以上では週に 3 コマの授業がある。実習期間には、非漢字圏のクラスを 2 コマ見学させていただいた。

J4 (中級) の漢字クラスでは、授業の冒頭に前回の確認テストを行ってから、新出漢字の学習を行っていた。見学日は「受・付・常・非・階・段」を学習していた。新出漢字を学習する際には、読み方や熟語を確認するだけでなく、動詞に使う漢字であれば文章を作り、助詞も合わせて確認していた。漢字の説明をするときにも、学生と常に会話しながら進めており、漢字がエピソードと共に記憶に残るように工夫がされていた。

J2 (初級) の漢字クラスでも、授業の冒頭に確認テストを行っていた。初級レベルの漢字クラスでは、カタカナの語彙の学習も行うため、確認テストには漢字だけでなく、カタカナの聞き取り問題も含まれていた。見学日は、「借・作・広・私・去」を学習していた。漢字を使った熟語には、「副作用」のように少し難しい語彙も、薬のパッケージなどの画像と共に出し、書くことは難しくても、「見て分かるようになれば良いと思います。」と紹介していた。

7. スピーチ大会

9月19日(金)に「第44回 インターカルト日本語学校スピーチ大会」が開催された。スピーチ大会は、インターカルト日本語学校で一番大切にされている行事である。3レベル以上の学生は全員参加必須のイベントでそれぞれのクラス代表が大会に出場する。以下はスピーチのテーマと出場者のレベルである。(プログラム順)

1. 「新しい自分」3レベル
2. 「新しい趣味に挑戦したい？」3レベル
3. 「限界を超えましょう」4レベル
4. 「フランス人と日本人カップルの日常生活」4レベル
5. 「勇気を出して」5レベル
6. 「遅い日本」5レベル
7. 「逃げるのは恥で、役に立たない」7レベル
8. 「38才のチャレンジ」3レベル
9. 「また赤ちゃんになってしまった!？」4レベル
10. 「人生の教科書はどこにある？」4レベル
11. 「忘れられない遊牧民の移動」6レベル
12. 「30歳どんな人になりたいですか？」6レベル
13. 「平和とは」9レベル

私達実習生も「東京女子大学」として一枠いただき、出場者の中から1~3位を選ぶ投票を行った。審査基準に基づいて、実習生で多数決をし投票する出場者を決めた。

「大会」ではあるものの、会場は非常に温かい雰囲気、自分のクラス代表がステージに立つときに鼓舞する様子や、スピーチ中に言葉に詰まってしまった出場者には拍手で応援する様子が見られた。

最優秀賞、優秀賞、学生賞、クラス代表賞(全員)などが表彰され、受賞者には賞状やトロフィー、景品が贈られていた。また、ネクステージ賞や凡人社賞、イーオンホールディングス賞などの協賛企業の賞では、代表の方の講評と共に、企業から景品が贈られていた。

クラスのレベルが上がるとスピーチに使う語彙のレベルが上がるが、どの学生のスピーチも胸が熱くなり感動した。人の心を動かすのに日本語のレベルなんて関係ないのだと強く感じた。

8. 教壇実習

私たちは、インターカルト日本語学校の登校日最終日に、各ホームクラスにて教壇実習を行った。J2aクラス・J2bクラス・J2cクラスでは「~そうです。(伝聞)」、J2sクラス・J2tクラスでは、「~てしまう(後悔・反省)」の導入項目の教壇実習を20分間行った。第1週の木曜日に、教案の作成や教壇実習について島崎先生からお話をいただき、2週目の火曜日に島崎先生に各々の

教壇相談をさせていただいた。授業外の時間でも、インターカルト日本語学校の先生方に質問させていただいたり、実習メンバー間での相談をしあったりして、教壇実習本番への準備を念入りに行った。

以下、実習で行った事や実習を通して気づいたこと・感じたことを各々で記述する。

J2a について（田村）

伝聞の「一そうです。」の導入を行った。この導入を行うにあたり、用意した話題は、「長野県に旅行に行くが、まだ観光する場所や食べるものを決めていないので調べて教えてほしい」というものと「天気を教えてほしい」というものである。教案作成時に、学生が行ったことはないが調べたら観光資源がたくさんあるものが良いなと思い、マイナーな旅行先として長野県を選んだが、18人中4人行ったことがあり、想定と違う状況に少しとまどった。しかし、経験して知ったことを伝えるときと見たり聞いたりして知ったことを伝えるときには違いがあることを説明し臨機応変に対応することができた。

また、教案作成時に想定していた例文は「長野県はりんごが有名だそうです。」だったが、学生の母語のウェブサイト調べてもらったので実際の実習では「長野県はおんせんにさるがいます。」というユニークな例文になった。学生の発言からその場で例文を作ることに緊張していたが、想定よりずっと良い例文を作ることができ、その後の教壇実習も楽しみながら進めることができた。

課題としては教室全体を見渡す、視線の意識があげられる。発言を多くしてくれる学生が教壇の目の前だったので、やり取りが近くで完結してしまっただけが多かった。学生が言ってくれたことをもう一度全体に伝わるように繰り返し言うなど、できたことはもっとあったと感じた。他にも、板書をするときに学生の方を全く見ることができなかつたため、間が度々できてしまった。学生が何も考えない時間になるべくないように工夫しなければいけなかつたなと感じた。

J2b について（出口）

伝聞の「一そうです。」の導入を行った。用意した話題は大きく2つで、1つ目は天気について、2つ目は特定の観光地について学習者に教えてもらおうというものであった。当初、実習の初日に作成した自己紹介ポスターを使って、「【私や他の実習生】は、〇〇が好きだそうです。」と話してもらおうという話題を考えた。しかし、こちらが用意したものでは、相手も知っている情報について伝聞してもらおうことになり、実用にそぐわないとのご指摘をいただいたため、その場で調べてもらった情報について「一そうです。」を使って話してもらおう教案が完成した。どのような回答が返ってくるか予想することが難しかったが、教壇実習までに入った授業の様子を思い浮かべながら反応を想像し、時間配分や指名の順番考えた。

当日は、質問が導入序盤に飛んできたり、一つ目の話題が想定より早く終わってしまったりしたものの、約20分間で導入を行うことができた。モニターを使用せずに、ホワイトボードのみで行ったが、会話をすることに集中してしまうと、書くタイミングを掴むことがとても難しかった。

た。授業後に感想を聞いたところ、「話していたら途中から意味が分かるようになった。」と言ってもらえたことから、様々な話題を通して意味を体感してもらうことの大切さを感じた。

J2c について（水迫）

伝聞の「～そうです。」の導入を担当した。用意した話題は1点目に「テイラー・スウィフトが婚約した」というニュース、2点目に天気予報についてを学生に教えてもらうというものであった。導入では「婚約したそうです」という例文を使おうと考えていた。「結婚」と「婚約」の違いを学生に理解してもらえるのか不安があり、比較して説明する例文も準備していた。しかし実際の授業では、学生が自発的に「婚約」という語を使ったため理解できていると思込み、丁寧に説明せず進めてしまった。結果として非漢字圏の学生の理解が不十分だった可能性があり、大きな反省点となった。当日は導入が想定より早く進み、運用練習の問題数も不足していた。そのため「理解を確認せずに進める危うさ」や「授業準備の丁寧さ」の必要性を強く感じた。授業後には先生から「答えが複数出せる話題を用意すれば会話の幅が広がり、時間を有効に使える」と助言をいただき、問題設定や時間配分の工夫が重要であることを学んだ。また、ホワイトボードを使用する際に、書くことに集中してしまうと、学生に何もしない時間を提供してしまったため、ホワイトボードの書き方がとても難しかった。また「そうです」は伝聞と様態で意味が異なるため学習者が混乱しやすいことを学び、例を多く準備しておくことの大切さを感じた。

J2s について（大久保）

文法項目「～てしまう（後悔・反省）」の導入を行った。授業の目標は、学習者の好きなことや特性を取り入れ、学習者を引き付ける授業にすることであった。そのために、授業前には学習者の特性や関心を授業見学や休み時間の会話を通してリサーチし、導入では学習者に身近な「宿題」を話題として取り上げた。宿題を忘れたときに教師に謝罪するという場面を設定し、ターゲット文型「～てしまいました」を自然に引き出せるよう工夫した。また、パターン練習の際には学習者の経験を尋ねる場面を組み込み、対話的な活動になるようにした。実習当日は、後悔や反省に伴う感情表現を理解してもらうために、表情や大きなジェスチャーを意識した。さらに、学習者の顔と名前、特性を把握した上で教案に反映できたため、授業中に笑いが生まれる場面もあり、学習者を引き付けることにつながった。一方で、学習者の発話を十分に待たず、サポートのつもりで追って言ってしまったり、パワーポイントの文字を同時に提示してしまったりしたため、学習者が自らの力で発言する機会を奪ってしまったことが反省点として挙げられる。緊張や焦りから沈黙を避けようとしてしまったことが原因であり、今後は沈黙を恐れず、学習者の自発的な発話を引き出すことや対話を意識する必要があると感じた。

J2 t について（青島）

「～てしまう(後悔・反省)」の導入を行った。教案作成にあたり、学習者が授業時間内に発言できる機会を多く設け、学習者との会話を行うという目標を立てた。今回は、今までに財布を無くした経験があるかどうか、またその時どのような気持ちだったかを学習者に質問し、「～てしまう(後悔・反省)」の導入へつなげた。学習者は投げかけた質問に対し積極的に答えてくれた。しかし、予想よりも沢山答えてくれ、それぞれの発言に少ししか触れることができなかった。学習者の発言をしっかりと受け止め、全員が参加していると思える授業を行うことが課題だと気付いた。新出語彙は私が例文として板書したものをリピートしてもらうのではなく、学習者が自ら考え、発言してくれるのを待ち、それを聞いてから板書して全体で確認すべきだった。担当の先生からは、絵カードやジェスチャーを見せて考える機会を設けることで、新出語彙の記憶が定着しやすくなるというアドバイスをいただいた。板書は、例文を一つ一つ書いたり消したりすることに時間をかけてしまった。教案作成の時点で、書く内容だけでなく文字の大きさやスペースも考えるべきだった。今回の教壇実習を通して、学習者とコミュニケーションを取りながら理解しやすく記憶に残りやすい授業を行うことの難しさと大切さを学んだ。

9. 実習スケジュール

	9月8日	9月9日	9月10日	9月11日	9月12日	9月16日	9月17日	9月18日	9月19日
11:15~12:05	11:30~ 自己紹介ポスター作成、昼休み	目的別授業							9:30~13:30 スピーチ大会 見学
12:15~13:05			12:30~ レクチャー②		12:30~ レクチャー③		目的別授業		
13:25~14:15	ホームクラス	目的別授業 フィードバック		ホームクラス	漢字クラス	教案相談②	ホームクラス		
14:25~15:15		ホームクラス	ホームクラス		ホームクラス			ホームクラス	ホームクラス *教壇実習20分
15:25~16:15	レクチャー①			教案指導①			漢字クラス		
16:25~17:15	目的別授業		目的別授業		目的別授業				
~17:30	目的別授業FB		目的別授業FB		目的別授業FB				

◆ 新宿日本語学校 ◆

岩村佳林

田中杏奈

茶山琳香

萩原結花

新宿日本語学校 実習報告

K21E1087 田中杏奈

K22H2021 岩村佳林

K22F2062 茶山琳香

K22H2100 萩原結花

1 実習概要

(1) 実習期間

5月15日(木)～6月12日(木)

※5月7日(月)10:00～11:00 新宿日本語学校にてオリエンテーション実施

※7月7日(月)イベント実施

※細かい実習日程は実習生によって異なる。

(2) 内容

事前アンケートをもとに、初級基礎・中級・上級のいずれかのクラスに割り振られ、担当の指導教官のもとで、各自実習を行った。実習前のオリエンテーションでは、学校概要と江副式教授法についてレクチャーを受け実習に臨んだ。主な実習内容は、担当クラスでの授業見学・授業補佐、教務補佐、担当クラスでの教壇実習、イベントの企画・運営である。

(3) 新宿日本語学校の概要

1975年に設立された新宿日本語学校は、高田馬場駅周辺に3つの校舎を構えている。2025年5月時点で、世界約60カ国から集まった約700名の学生が在籍しており、初級から上級までのクラスに加え、学習者一人ひとりのニーズに応える多様なクラスが開講されている。新宿日本語学校の最大の特徴は、独自の視覚的教授法である「江副式教授法」とデジタルコンテンツのVisual Learning Japanese (VLJ) とのブレンド型学習にある。これにより、学習者は日本語を迅速かつ効率的に習得することが可能である。新宿日本語学校は、日々の日本語教育に加えて、日本語文法や漢字教育の研究、日本語教育の解析・分析など、教育内容そのものの探求にも注力している。

2 コース

(1) 平日コース

月曜日から金曜日までのクラスで、日本で学びながら生活をする。1年課程または2年課程で構成されている。目的に合わせて、一般コースか特進コース、上級からは一般か進学のコースを選択することが可能となる。

〈一般プログラム〉

コミュニケーションを重視した学習をしたい人向けのコースで、ロールプレイやグループ学習を主に行う。日本語の総合的な理解力を磨くことができる。3か月ごとに初級基礎、初級1、2、中級基礎、中級1、2、上級1、2の順に進めていく。中上級を修了することで、上級レベルに進むことができる。

〈特進プログラム〉

大学、大学院や専門学校へ進学したい人向けのコース。進学が目的ではないが、短期間で日本語の上達を目指している人向けである。半年で初級から中級にレベルアップし、それ以降は3か月ごとに上級1、2、3①、3②と進めていく。

〈レベル〉

・初級（初心者～N5以上）

日本語の文法と会話の基本を学ぶ。重箱カードや文法ノートを用いて学習し、挨拶、簡単な買い物や会話などの日常の表現を習得することを目標としている。また、ひらがなとカタカナが読めてきれいに書けること、漢字が80字読むことができ、きれいにかけることも目標としている。

・中級（N4～N3）

状況に基づく日本語を学ぶ。初級での文法事項を基盤に、5技能をバランスよく運用する力を身につける。実践に即した会話力と深い理解を、活動的なレッスンで実現する。

・上級（N2～N1）

日本人とのコミュニケーションが支障なくできるレベルを目指す。実生活で日本語を使ったコミュニケーションにほとんど不自由しない学生を対象に、小説や評論、新聞記事など、さまざまなジャンルの日本語を教材として取り入れる。プロジェクトワークを通して、あらゆる場面での日本語の運用力を身につける。

〈特別クラス〉

ビジネス日本語、観光ビジネス日本語、日本語教師養成の特別クラスがある。ビジネス日本語は、日本語におけるビジネスコミュニケーションを中心とした上級クラスである。観光ビジネス日本語は、日本語による観光事業サービスを学ぶクラスである。日本語教師養成は、江副式教授法で日本語教師になることを目標としている。

〈オプションクラス〉

漢字クラス、日本語能力試験対策クラス、日本留学試験対策クラスなどがある。漢字クラスでは、生活漢字クラスと応用漢字クラスがあり、漢字に不慣れな学生向けに実施されている。日本語能力試験対策クラスは、合格に必要な知識だけでなく、試験を受ける際に注意することや役立つポイントなども身につけることができる。日本留学クラスは、大学などの高等教育機関への入学を希望する学生へ講座を提供している。

(2) その他コース

サマーコース、オンラインクラス、プライベートレッスンなどのコースがある。サマーコースは短期の特別コースとなっており、日本語を教えながら学生に日本と日本文化を紹介している。

アクティビティが用意されており、一人一人の日本語能力に対応している。午前中は日本語の授業、午後は日本の文化を体験することができる。日帰り旅行ができる点が特徴的である。オンラインクラスは初級、中級、ビジネス日本語や日本語能力試験など、様々なレベルを完全オンラインで学ぶことができる。30時間のクラスで、週1～2回のコースである。プライベートレッスンのクラスは初級から上級、会話、ビジネス日本語、聴き取りまたは漢字等、目的別に学習することができる。クラスの授業ではなく、個人が1時間単位で受けることが可能で、昼間・夜間のクラスでは時間が間に合わないような方を対象にしている。対面・又はオンラインでの受講が可能である。

3 教材・教授法

(1) 江副式教授法

新宿日本語学校では、学習者が日本語を素早く効率的に学習できる方法とされている江副式教授法を使用している。この教授法は、外国人に対する日本語教育のみならず、日本人に対する国語教育にも活かされると、注目を集めている。特に、ろう学校ではその有効性が認められ、一部の学校で取り入れられ始めている。

「江副文法」では日本語を「情報」と「述部」に分け、その間に二列の助詞があると考えられている(図1参照)。



図1 江副文法における文法の考え方 (出典：新宿日本語学校 江副式教授法)

〈重箱カード〉

江副式教授法では、日本語の品詞を可視化させたカードを用いる。名詞、動詞、助詞などの様々な種類のカードを並び替えることで正しい文章を作ることができる。品詞ごとに色や形が異なり、同じ形のカードにはそれぞれ異なった模様が描かれており、色覚の特性にも配慮されている(図2参照)。

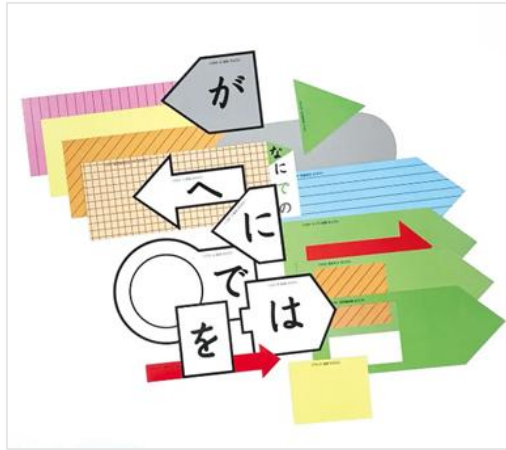


図2 重箱カード（出典：新宿日本語学校 江副式教授法）

〈テンスアクション〉

江副式教授法では、動詞の活用を覚えるために重箱カードに加え、テンスアクションも使用する。主な動きを図3に示す。「食べる」という動詞を例にすると、図3の①のように手の甲を上に向け、前に出す動きは現在形を表し、「食べます」を導入できる。②のように前に出した手を横に振る動きは否定形を表し、「食べません」を導入できる。③のように手の甲を上にし、頭の後ろに向ける動きは過去形を表し、「食べました」を導入できる。④のように腰の位置で手を後ろに振る動きは過去の否定形を表し、「食べませんでした」を導入できる。「食べましょう」は、意味によって動きが異なり、⑤のように両手を自分に向けると、自分の意志を表す「ましょう」、⑥のように両手を相手に向けると、指示を表す「ましょう」、⑦のように両手を上げると、一緒に行動することを促す「ましょう」を導入することができる。



図3 テンスアクションの例

(2) VLJ (Visual Learning Japanese)

江副式教授法は、情報技術に統合しやすい側面があり、新宿日本語学校ではオリジナルブレンド学習システムであるVLJも使用されている。このシステムは、オンライン・コンテンツとオフライン・コンテンツの組み合わせであり、アプリやLMS（ラーニング・マネジメント・システム）を使用することで、いつでも授業のコンテンツにアクセスすることができ、効率的に日本語を学ぶことができる。

4 イベント

(1) 概要

実習期間に、2時間程度のイベントを実習生で企画、実施するという活動を行なった。以下、イベントの概要を述べる。

- ・日時：7月7日（月）13:00～15:00
 - ・テーマ：日本の夏を楽しもう
 - ・内容：日本文化を体験してもらう
 - ・対象者：新宿日本語学校の学習者
 - ・目的：○遊びを通してリフレッシュするとともに、日本語や日本文化への理解促進
○学習者同士の交流を促進し、コミュニケーションの機会を広げる
 - ・準備したもの：4つの体験コーナーで使用する道具、参加記念品
- ※ (3) に詳細を記載

(2) ポスター



- ・工夫点：
 - 東京女子大学の学生の顔写真を載せ、学習者が安心感を持てるようにした。
 - イベント内容が一目でわかるように、イラストや見出しを大きく配置。

(3) イベントの準備

今回のイベントでは、以下の4つの活動を実施するための準備を行なった。

○七夕の短冊作り

→参加者が自由に願いごとを書けるよう、短冊や穴あけパンチ、紐を準備した。また、短冊をより華やかに飾れるよう、シールなどの装飾用具も用意した。笹については、新宿日本語学校側で準備していただけたことだったため、メールにて依頼の連絡を行った。

○コイン落とし

→学校側に水槽とコップの準備を依頼したところ、どちらも適した大きさのものがあつたため、それらを使用させていただいた。水槽は、使用するコップのおよそ2倍の高さがあり、コインが沈む様子を見やすくするのに十分な深さがあつた。コップは内部が見える透明な素材のもので、ゲームの趣旨に適していた。使用する1円玉は実習生が約30枚用意した。

○射的

→輪ゴムと割り箸を使って射的用の銃を作成し、的となるものは折り紙で手作りした。安全に遊べるよう射程距離や配置にも配慮した。

○豆掴み

→「マナー豆匠」というキットを使用し、豆や箸、容器などを準備した。掴みやすさや見た目の楽しさを考慮し、参加者が気軽に挑戦できるよう工夫した。

(4) イベントの企画・実施を通して学んだこと

今回のイベントを通して、学習者にとって「学ぶ場」と「楽しむ場」をどのように両立させるかを考える機会となった。事前の企画段階では、文化紹介を目的としつつも、参加者が緊張せず自然に交流できるように、遊びの要素を取り入れた内容を工夫した。結果的に、多くの学習者が笑顔で参加しており、文化体験を通して日本語に親しむという目的を達成できたと感じている。一方で、当日は予想を超える人数の参加があり、進行をその場で調整する必要が生じた。その経験から、現場では計画通りに進めるだけでなく、状況を見ながら判断し、即座に行動する柔軟さが求められることを実感した。特に、メンバー同士で声を掛け合い、役割を変えながら対応したことで、チームとして動く力の重要性を学んだ。また、実際に学習者と接する中で、「一緒に楽しむ」姿勢こそが信頼関係を築く第一歩であると感じた。文化を伝えることは、知識を教えることにとどまらず、共に体験し、感情を共有することでより深い理解につながる。そのためには、学習者の表情や反応を観察し、その場の雰囲気に合わせて声をかけるなど、相手に寄り添う柔軟な対応が大切だと学んだ。この経験を通じて、教える側が一方向的に知識を与えるのではなく、参加者と同じ目線で関わるのが、言語教育や異文化交流の場において大切であると実感した。今後の日本語教育実践においても、この姿勢を大切にしていきたい。

(5) イベントを実施した感想

〈七夕の短冊作り〉

七夕コーナーでは、学習者が短冊に日本語で願い事を書き、笹に結ぶ活動を行った。ルールが

シンプルであるため、初級レベルの学習者でも気軽に参加できていたが、日本語で願い事を書くことに難しさを感じる学習者も見られた。その際には、「これはどうやって書きますか」と私たちに質問しながら、積極的に表現しようとする姿勢が印象的であった。また、短冊を飾るためのシールやマスキングテープなどを準備していたことで、「日本語を書く」ことだけに集中する時間にならず、装飾を通して楽しみながら活動できる雰囲気が生まれていた。短冊の内容を通じて、私と学習者の間だけでなく、初対面の学習者同士でも自然に会話が生まれ、お互いの夢や将来について日本語で語り合う様子が見られた。活動を通して、学習者の日本語力だけでなく、表現力やコミュニケーション力を引き出すことができたと感じている。私自身も学習者と交流を深めることができ、この時間をきっかけに仲良くなった学習者から、手作りのミサンガをプレゼントしてもらおうという嬉しい出来事もあった。言語を超えて心が通う体験となり、学習者との関わりの中で多くの学びを得ることができた。

〈コイン落とし〉

水の張ったビンの中にあるコップの中に、コインを落として入れるというシンプルな遊びであったため、難しい説明がなくとも参加者にルールを理解してもらうことができた。勝敗をつけるというルールを設けなかったこともあり、参加者によっていろいろな楽しみ方ができ、複数回挑戦してくれた人は前回よりも多くのコインを入れるために試行錯誤したり、友人同士など複数人で参加した人は互いに入ったコインの枚数を競い合ったりと、参加者ごとに楽しんでいる様子だった。他のコーナーと比べて一人あたりの体験時間が短かったことで、参加者が多い時間帯は、参加者が待つことなく遊びを体験できたが、参加者が少なくなる時間帯では、体験に時間を必要とするコーナーに参加者が偏ってしまったため、他のコーナーの1回あたりの体験時間も考慮した上で、ルール設定をする必要があったように思う。

〈射的〉

射的用の銃は輪ゴムと割り箸を使って3丁作成し、的は大小さまざまなサイズで七夕にちなんだものを10個程度折り紙で作成した。企画時は、配布された輪ゴム10個をすべて打ち終えたら終了というルールを設定していたが、学習者から、当たるまでやりたい、全部撃ち落としたいという要望があった。そこで、人があまりいない時間帯はルールを変更するなどの対応を行った。的を狙って集中する様子や、隣り合った学習者同士で応援しあう様子が印象的であった。体験の前にやり方を説明し、一度デモンストレーションを行ってから実際に体験をしてもらった。スムーズにできていた学習者もいたが、輪ゴムをかける位置が分かりにくく、うまくセットできないという相談を受けることもあった。やり方は、ポスターにして常に掲示しておくなどの工夫があれば、より分かりやすかったと思う。

〈豆つかみ〉

箸で豆をつかみ、トレーに移すというシンプルな動作のため、ルールの説明を簡略化しやすく、すぐに遊びに移ることができた。また、制限時間を作ったことでゲーム性が高まり、普段箸を使うことがあまり得意ではないと言っていた学生にも楽しんでもらえたように思う。また様々な豆の形があったので、周りに人がいない時間に、難しい形の豆をつかめるかなど、基本のゲームとは違った遊び方で楽しむこともできた。短い時間制限にしていたものの、1ターンで2人し

かプレイすることができないため、入り口付近の配置だったこともあって、人が溜まってしまっていた。もう1台用意していたら、もっと時間を有効活用できていたと思う。



上記の図はイベント当日の実際の様子である。 実習生撮影

〈参加記念品に関して〉

昨年度のイベント参加者数を参考にし、参加記念品として折り紙を作成した。テーマである「日本の夏を楽しもう」に合わせて、うちわと浴衣の折り紙を用意した。当日、参加者に記念品を渡した際には、「かわいい」「持って帰って飾りたい」などの声が多く聞かれ、日本文化に対する関心や親しみを感じてもらえたようだった。また、折り紙をきっかけに学生同士や私たちとの会話が生まれ、交流の促進にもつながったと感じた。



参加記念品の折り紙 実習生撮影

5 実習内容（全体）

(1) 概要

約1か月の実習期間の中で、40時間の実習を行った。この期間は、実習生1名につき、1名の担当教官についていただいた。新宿日本語学校へ登校する日は9日間もしくは10日間であった。具体的な実習の内訳は、担当教官の授業見学・補佐が4.5時間×7回、担当教官が担当するクラスのレベルとは異なるクラスの授業見学が2時間×1回、教務事務が4.5時間×1回、教壇実習1コマ(45分)×1回、イベント2時間×1回である。

(2) 実習内容

①授業補佐

- ・授業前：教室設営、教具等準備
- ・授業中：授業一部担当、ボードへの記入、ボード消し、会話練習、学習者のフォロー他
- ・授業後：教具等片付け
- ・その他：宿題やテストの添削
- ・教壇実習：1コマ（45分）を担当

②教務補佐

- ・教務室の掃除片付け
- ・教材教具作成
- ・会話練習パートナー
- ・その他付随する業務

※校舎や実習時間によって職員室の清掃やゴミ回収等を行った。また、その他付随する業務については、教務室にある教材をExcelにまとめる作業を行った。

③イベント企画・実施

- ・7月7日（月）13:00～15:00

※実習生全員が参加できる日程に実施

(3) 授業時間

	午前	午後
1 時間目	9:10 ～ 9:55	13:30 ～ 14:15
2 時間目	10:05 ～ 10:50	14:25 ～ 15:10
3 時間目	11:00 ～ 11:45	15:20 ～ 16:05
4 時間目	11:55 ～ 12:40	16:15 ～ 17:00

例として午前のクラスを担当した実習生のスケジュールは以下のとおりである。

時間	内容
8:30 ~ 8:40	教務室掃除・授業準備
8:45 ~ 8:50	教務朝礼(オンライン)
8:55 ~ 9:05	全体朝礼
9:10 ~ 12:40	授業見学・補佐等
12:40 ~ 12:50	教室片付け
12:50 ~ 13:00	宿題添削等

6 実習内容（個人）

〈田中杏奈〉

(1) 担当クラスの日本語レベル：初級基礎 A 午前クラス

初級基礎クラスは、日本語学習の経験がほとんど、または全くない学習者向けのコースである。簡単な自己紹介や会話、ひらがな・カタカナの読み書きができる。このクラス終了時には、日常生活の様々な場面で活用できる日本語の表現の習得を目標としている。

(2) クラスの様子

クラスの人気は計 13 人だが、日によって参加人数は 8~11 人と流動的であった。年齢は 19 歳から 40 代までで、出身はイタリア、オーストラリア、タイ、中国、チリ、デンマーク、ベトナム、ポルトガル、ミャンマー、ラオスで構成されている。短期滞在の学習者が多く、このクラスのみを受講する学習者が大半であった。英語を得意とする学習者が多く、休み時間に学習者同士が英語で話している様子が見られた。授業内でも、新しい文法や単語を導入する際、先生が英語を補助的に使うことが多々あった。

(3) クラスの活動

・文法等教科書に即した学習

授業では主に、様々なテーマ・場面・機能に則した全 40 課のオリジナルテキストを用いる。テキストは 1 日に 1 課のペースで学習する。実習開始時には 30 課まで進んでいた。新しい表現の導入の際は、「重箱カード」（新宿日本語学校オリジナルの文法カード）や LMS を使用して、形や表現を目や口で覚えながら学習する。毎週金曜日に復習テストを行い、習熟度チェックを行う。

・漢字学習

漢字の絵、成り立ち、楷書が並んでかかかれているプリントを使用する。新しい漢字を導入する際は、絵から楷書の漢字になるまでの短い動画などを見せるなど、視覚的に理解を促すような工

夫がされていた。

・英語学習

英語の動画教材と日英穴埋めプリントを使用した英語学習が行われていた。この英語学習は準備教育のひとつである。日本の高等教育機関への進学には、母国で12年以上学校教育がされていることが求められる。母国の教育制度が12年未満の場合、文部科学大臣指定準備教育課程の教育機関で、日本事情・日本史・公共(現代社会)・英語を規定時間学ぶことで、日本の高等教育機関への入学資格を得ることができる。

・プロジェクト発表(自己紹介)

今までに学習した文法や単語を活用し、出身国のおすすめの料理や観光地の紹介を含む自己紹介文とスライドを作成する。プロジェクト発表前の授業で、原稿のチェックと発表練習を行う。本番では原稿を見ずに発表することが求められる。

(4) 学んだこと

今回の教育実習を通して、学習者主体の授業を構築するための重要な視点を数多く学んだ。一つ目は、自然な例文と「自分ごと」として想像しやすい場面設定の重要性である。見学した授業では、学習者の身近な話題から学習できるような工夫がされており、学習者が実際に使う際のイメージの手助けになっていると感じた。授業見学中にグループワークへ参加して個々に話を聞いたり、発表で得た情報をその後の活動に組み込んだところ、学習者から生き生きとした反応が返ってきたり、やりとりが生まれたことから、自然な例文と「自分ごと」として想像しやすい場面設定をするには、学習者の興味関心・文化背景について知ることが不可欠であると痛感した。そして学習者視点での教材準備は、学習者との双方向的な関わりを作り出すことができると学んだ。二つ目は、学習者の間違いに対して、間違い方や教室の状況、学習者のレベルに合った指摘の仕方があるということである。担当クラスで授業の一部を担当した際、語順が分からなくなった学習者に対し、私は身振りや口頭で説明したが、学習者が正しい語順になるまで時間がかかった。授業後には指導教官の先生から、重箱カードを出して説明すればより視覚的にわかりやすかったのではないかとご助言いただいた。この経験から、目の前の学習者の間違い方をすぐに見極め、その場にある教材を最大限に活用して、その時出来る最適な方法で伝える対応力が必要だと気づいた。本実習で得た「学習者視点での教材準備」「個々に応じた柔軟な対応」という大きな学びを、今後の実践に繋げていきたいと考える。

〈岩村佳林〉

(1) 担当クラスの日本語レベル：初級基礎 A 午前クラス

初級基礎クラスは、日本語学習経験がまだ浅く、基礎的な文型や語彙を学習するクラスである。そのため、授業内容は日常生活でよく使う表現や簡単な会話を中心に構成されている。

(2) クラスの様子

担当クラスは18名で、ほぼ毎回全員が出席していた。学習者は台湾、カナダ、オーストラリア、ミャンマー、イギリス、フランス、アメリカ、インド、中国、スリランカ、イタリア、ブラジルと多様な国籍で構成されており、年齢層も10代から30代までと幅広かった。クラスの雰囲気

気は明るく活発で、発言も多く積極的に授業に参加する姿が見られた。宿題もきちんと提出されており、学習に対する意欲が高いことがうかがえた。国籍や年齢が異なる学習者同士でも、互いに協力しながら課題に取り組む姿が見られ、活発な交流が自然に生まれていた。

(3) クラスの活動

・文法等教科書に即した学習

授業では、教科書の内容に沿って文法指導が行われていた。文型を導入する際には、例文やイラストを用いて具体的な場面を示すことで、学習者が文法の使い方を自然に理解できるよう工夫されていた。また、ペアワークや口頭練習を通して、学んだ文法を実際に使ってみる機会を多く設けていた点が印象的であった。さらに、新宿日本語学校独自の教材である「重箱カード」(オリジナルの文法カード)も活用されていた。これは、新しい表現を導入する際に使用されるもので、文法の構造や用法を視覚的に整理しながら理解を深められるよう工夫されている。こうしたカード教材に加えて、授業ではLMS(学習管理システム)も併用されており、デジタル教材を通して復習や定着を図る仕組みが整っていた。紙媒体の教材だけでなく、デジタルツールを組み合わせることで、多面的かつ効果的な学習が実現していた。

・漢字学習

授業の最後に、毎回短時間の漢字学習が取り入れられていた。通常の教材に書き込む場合は文字が小さく、教師が一人ひとりの字を細かく確認することが難しい。そのため、一人につき一枚ずつ小型のホワイトボードが配布され、そこに漢字を書く形式が採られていた。これにより、教師は全員の書いた字をその場で確認し、誤りがある場合は隣に正しい字を書いて即時に修正を促すことができていた。この方法によって、学習者はその場で自分の誤りに気づき、正しい形を視覚的に理解しながら定着させることができていた。さらに、漢字導入時には、新宿日本語学校独自の教材である「絵から字への変化を示す短い動画」が活用されていた。絵が文字へと変化していく過程を視覚的に示すことで、漢字の意味や成り立ちを直感的に理解しやすくしていた。この動画を見た際には学習者の間で笑いが起きる場面も多く見られ、特に非漢字圏出身の学生にとっては、漢字に対する苦手意識を軽減し、楽しく学習できる雰囲気づくりにつながっていた。

・イベント学習(防災の日・進路の日)

〈防災の日〉

防災に関する知識を深めることを目的として、「東京マイ・タイムライン」の作成が行われた。学習者は自分の住んでいる地域や行動範囲をもとに、災害時の行動計画を立てる活動に取り組んでいた。授業中には、災害に関連する語彙や表現も学びながら、日本の防災文化への理解を深めることができていた。

〈進路の日〉

進学説明会では、学習者が関心のある大学のブースを自由に訪問し、担当者から直接説明を受ける形式が採用されていた。ブースによっては中国語や英語で対応できるスタッフが配置されていたが、多くの大学では日本語のみでの説明が行われていた。そのため、日本に来て間もない初級レベルの学習者にとっては、内容を十分に理解するのが難しい様子も見られた。しかし、学習者たちは資料を見ながら熱心に話を聞いており、自分の将来について考える良い機会になっていた。

たと感じた。

(4) 学んだこと

実習を通して、私は大きく2つのことを学んだ。一つ目は、「教えることは同時に学ぶことでもある」ということである。授業を補助する中で、文法や語彙の導入方法に迷う場面が多くあった。どのように説明すれば学習者にとって分かりやすいのかを考えるうちに、自分自身の日本語理解の不十分さに気づかされた。質問に答えるために文法書を調べたり、例文を考え直したりする過程で、教えることによって自分の学びが深まることを実感した。また、学習者が理解して笑顔を見せた瞬間に、学ぶことを支えることの喜びを感じた。二つ目は、学習者との関係づくりの大切さである。授業中の声かけや休み時間の会話を通して、学習者が安心して発言できる雰囲気づくりの重要性を学んだ。特に初級クラスでは、間違いを恐れて発言を控える学習者もいたが、教師が笑顔で受け止めることで次第に表情が和らぎ、積極的に話す姿が見られるようになった。こうした経験を通して、知識を教えるだけでなく、安心して学べる環境を整えることが日本語教育において欠かせない要素であると感じた。

〈茶山琳香〉

(1) 担当クラスの日本語レベル：中級基礎

N2～N3に該当するレベルであり、身近なテーマについて簡単な意見を述べる、説明をするといったことができる。5技能をバランスよく運用する力を身につけることを目標としている。

(2) クラスの様子

全体で17名のクラスであるが、実際に来ているのは15名程度であった。年齢は20～40代。国籍は、アメリカ、メキシコ、ミャンマー、スペイン、フランス、中国、台湾などで構成されており、様々な国の学習者が在籍している。日本語を活かして働きたい人が7割、進学希望が3割程度だった。ペアワークなどの話し合いはスムーズで、休み時間に学生たちが席替えをして戻ってきた教師を驚かせるなど仲の良い様子が見受けられる。基本的には日本語を用いているが、日本語でうまく表現できない場合や休み時間などには、日本語ではない言語で会話していた。

(3) クラスの活動

・文法等教科書に即した学習

オリジナルテキストを用いて学習する。日常生活での場面やこれまでの生活でであったであろう場面を用いるような導入をして、学習者たちが話をしながら文法項目を学ぶことができるように構成されていた。ペアワークとして、テキストの音読をしながらわからない部分がないか確認する、作文をして発表することがあった。

・漢字

オリジナルテキストを使用し、一日に6つずつ漢字を学習する。パーツごとに分解しながらその漢字がどんな意味を持つのかをイメージしやすいように一つ一つ確認し、該当漢字をつかった熟語なども同時に学ぶ。また、前回学習範囲のテストを行う際には、テスト前に一度ホワイトボードに書くなどして、全体で振り返りを行う。

・防災の日

防災に関して学習する日が設定されており、前日と当日の二日間、防災について学習した。前日は、当日に使う語彙などを、プリントを用いながら学習したり、自分の国の災害についてグループで話し合ったりした。当日は、東京消防庁などが作成している防災マップのようなものを使用して、日本の災害について学び、自分の地域で災害が起こったときにすること（マイタイムライン）を作成した。

(4) 学んだこと

大きく二つの学びがあった。一つ目は、学習者への寄り添い方である。大学の授業でも学習者の存在を意識することは学んでいたが、実際に教育実習に参加して、立場を意識するとはどういうことなのかを具体的に理解することができた。彼らが日本で生活する中でどんなことに会うのか、過去にどんな経験をしたことがあるのかを想像することが、授業づくりに役立つことがわかった。二つ目は、自分事として考えることだ。学習項目やテーマに対して、学習者がどう感じ、何を考えるのかを想像することはとても大事だが、自分だったらどう思うのかを考えることで、より学習者に近い感覚を得ることができると分かった。授業を見学している中で、テキストに書いてあることを表面的になぞるよりも、「私はね」「先生はね」と自分の経験を交えて話したり、正直な意見を述べたりしているときは、学習者が話している先生を真剣に見つめて話を聞く姿勢をとっていた。自己開示にも近いが、そうすることで学習者との距離が縮まり、よりよい授業を運営できるようになるだけでなく、教室の雰囲気をよくする効果もあると学んだ。

〈萩原結花〉

(1) 担当クラスの日本語レベル：上級1

N2合格相当レベルであり、実生活の日本語を使ったコミュニケーション場面で、ほとんど不自由しない学習者を対象としている。新聞を含む様々な文章の内容を読み取ることや、身近な社会問題についての話し合い、書き言葉を使って文章を書くことができる。あらゆる場面での日本語の運用能力を身につけることを目標としている。

(2) クラスの様子

クラスの人気は16名で、学習者の出身国は、アメリカ、インドネシア、オーストラリア、スペイン、フランス、ベトナム、ミャンマー、モンゴル、中国、香港、台湾と多様であった。日本での進学・就職を希望する学習者が多く、中には志望校を既に決めている学習者もいた。授業中は、学習者からの質問や発言が多く、グループでの話し合いも活発に行われ、明るく真面目な雰囲気であった。

(3) クラスの活動

・スピーチ

1時間目の最初に、1分スピーチや3分スピーチが行われた。1分スピーチのテーマは、「今学期の目標」、「最近気になったニュース」、「紹介したいもの・こと」の3つあり、3分スピーチのテーマは、「日本から持って帰りたいもの・こと」、「将来したい仕事・自分の仕事」、「残したい自国の文化」の3つであった。スピーチの後、日本語での質疑応答の時間が設けられていた。

- ・文法等教科書に即した学習

漢字、語彙、文法、読解などの内容は、オリジナルテキストを用いて授業が行われた。漢字はN1レベルで、意味や熟語、例文をイラストや写真を用いながら確認し、毎回スピーチの後にテストが行われていた。語彙は、意味を確認した後、テーマによって教師と学習者が対話したり、例文を作成したりするなどの活動が行われた。文法の内容は、「呼応の副詞」や「接続詞」など様々であり、学習者が例文を作る機会が多く設けられていた。読解では、歴史的な物語など様々なジャンルの文章が使用されていた。授業全体を通して、教師と学習者が対話する場面が多かった。

- ・ラジオドラマ制作

実習期間中、ラジオドラマを制作するという学習者の主体性を重視したプロジェクトワークも行われた。グループごとにストーリーを考え、読む練習をし、発表するという流れであった。読む際には、流暢に読むこと、アクセントを意識することに加え、それぞれ場面や登場人物の感情に合わせた読み方をすることが求められていた。

- ・イベント（防災の日・進路の日）

防災の日では、日本の災害や避難の流れについて学び、自分の地域の避難場所などを確認しながらマイ・タイムラインを作成したり、避難時の持ち物についてグループで話し合いを行ったりした。また、進路の日では、進学希望と就職希望に分かれ、マナーについての学習や、外国人学生向けの学校説明会への参加など、それぞれの活動を行った。

(4) 学んだこと

今回の実習を通して、よりよい授業づくりのために重要なことを大きく二つ学んだ。一つ目は、学習者が自身の身近なことと結びつけることができるような問いかけや説明をすることである。授業では、導入として説明の前に、学習者へ問いかけや、漢字や語彙、文法を説明する際には、学習者が想像しやすい内容の例文を用いて行っていた。また、授業中は教師と学習者が対話する機会が多く設けられており、学習者自身のことや、それぞれの出身国についての話題も多くあった。このような学習者にとって身近な話題を絡めながら学習することによって、授業内容の理解が促進されたり、授業の雰囲気が良くなったりすることに加え、多文化に触れ知識を得る機会にもなることを学んだ。二つ目は、学習者の理解度に合わせて柔軟に対応することである。上級では、アカデミックな内容も含まれるため、難しい漢字や語彙も多くあったが、適宜言い換えや例を用いるなどして、限られた時間の中でも学習者が理解できるように臨機応変な対応がなされていた。また、学習者が例文を作成する機会も多くあり、その際に間違いがあった場合には、学習者が文章にしたい内容を教師も理解した上で、「なぜ違うのか」を伝え、添削をしていた。こうした学習者に寄り添いながら授業を行うことは、学習者が間違えることを恐れずに日本語を学ぶことができる雰囲気づくりにもつながっていることを学んだ。

◆ 友国際文化学院 ◆

小泉采生

坂崎菜生

佐藤美咲

章莉華子

堀江柚菜

友国際文化学院 実習報告

K21G1031 坂崎茉生
K22H2046 小泉采生
K22H2056 佐藤美咲
K22F2085 堀江柚菜
K22G1064 章莉華子

1. 実習概要

(1) 実習期間

7月期：7月7日（月）～25日（金） 1名

8月期：8月4日（月）～22日（金） 2名

9月期：9月1日（月）～19日（金） 2名

※実習オリエンテーションは6月11日（水）に実施

(2) 実習の流れ

第一週：授業見学

第二週・第三週：模擬授業、教壇実習①・②

教案指導を受けた後、実際の授業を想定した模擬授業を行った。学習者役は、指導教員及び常勤教員、または指導教員と実習生1名の2名が担当した。

(3) 授業時間と教壇実習

通常、本コースの授業は9:00～10:30、10:45～12:15の90分2コマである。実習生はそのうちの45分を与えられて教壇実習を行う。なお、時間は余っても伸びても良いとオリエンテーション時に伝えられ、実際、45分以上授業を行った者が多い。

2. 学校概要

友国際文化学院（認定日本語教育機関 申請中）

所在地：東京都新宿区

設置者：株式会社ライセンスアカデミー 友ランゲージグループ

開設年月日：2014年10月1日

総収容定員数：120名

教育課程：進学2年コース(4月入学)、進学1年6ヶ月コース(10月入学)

校長：金子史朗 先生

3. コースについて

GO! GO! Nihon! Study Trip

Study Trip は株式会社ゴーゴワールドが主催する文化体験型の短期留学プログラムである。日本と韓国、スペインの留学先があり、午前は語学の勉強、午後はその国の様々な文化体験を行う。実習先の友国際文化学院は日本における語学の授業を担当した。

本実習では、日本留学プログラム GO! GO! Nihon! Study Trip の内、7~9月に開催された5コースの参加者を対象に教育実習を行った。初日にプレースメントテストを行い、例年 A クラスは「日本語教育の参照枠」の A2.1~A2.2 レベル程度、B クラスはほぼはじめて日本語を学ぶ人向けのクラスになる傾向がある。全コース、最終週には合同クラスで書道体験を行い、最終日にコース期間で一番印象に残っていることを show & tell で発表した。

【7月】

Youth Japan : 15 歳~17 歳が参加。7 月 7 日~18 日。

午後は、「カワイイ弁当」「カップヌードルミュージアム」「高校訪問」などに行った。

Traditional Japan : 19 歳~44 歳が参加。7 月 7 日~25 日。

午後は、太鼓や着物&茶道、京都旅行、居酒屋に行った。

※コース混合でクラス分けあり。

【8月】

Japan Korea : 21~46 歳が参加。4 週間のうち、前半 2 週間を日本 (8 月 4 日~8 月 15 日)、後半 2 週間を韓国で過ごす。

Summer : 18~48 歳が参加。3 週間プラン (8 月 4 日~8 月 22 日) と 4 週間プラン (8 月 4 日~8 月 29 日) に分かれる。

※両コースともに、日本語学習及び午後の活動は合同で、午後は、チームラボや盆踊り、居酒屋などに行った。(日本語学習に関してはコース混合でクラス分けあり)。

【9月】

Otaku Japan : 19~38 歳が参加。9 月 1 日~9 月 19 日。

午後は、チームラボ、メイド喫茶、カラオケなどに行った。

4. 使用教材

A クラス : 『日本語おしゃべりのたね 第 2 版』

親しみやすい話題でおしゃべりしながら日本語を学べる話題シラバスのテキストである。全部で 20 の話題があり、会話のたねとして初級レベルの文型やイラスト、グラフが多数掲載されている。

Bクラス：『まるごと 入門A1 りかい』

JF 日本語教育スタンダードに準拠した、Can-do を目標設定にした教材。現実の場面で使える会話の学習と同時に日本文化についても会話や活動を通して学習できるように設定されている。

5. 実習内容

【7月】

〈坂崎茉生〉

(1)担当クラスの日本語レベル：Bクラス

来日前に独学で少し日本語を勉強してきたという学生が2～3名。そのほかは日本語学習が初めてという人が多い。基本的にローマ字で授業を進めているが、50音表を見ながらひらがなやカタカナを積極的に書こうとする姿が多く見られた。

(2)クラスの様子

学習者の主な出身地はアメリカ、イギリス、イタリア、ドイツ、メキシコで、参加者同士で年齢差がほどよくあるため、互いに教え合い支え合う雰囲気が見られた。非常に協力的で温かいクラスで、筆者が教壇実習時にも授業の進行を助けてくれた。

(3)クラスの活動

教壇実習一回目は「～することが好きです」の導入と練習を担当した。「好きなことマップ」でお互いの好きなものを視覚的に共有して、共感力を高めながら練習できた。一方、テンポのコントロールや文法説明の不明確さで学習者を混乱させるなど課題があった。二回目の教壇実習では「それから」で文を時系列につなげることを導入し、前日の学習者の旅行行程から推測して準備をし、スムーズに導入を成功させることができた。応用練習も、学習者同士が本気で聞きたい気持ちになって会話をして練習することができた。

(4)学んだこと

第一には、「クラスは先生だけでなく全員でつくるもの」である。先生一人が作り上げるものではなく、互いに支え合って助けられて授業が成り立つ。それが成り立つような雰囲気をつくるのが大切だ。

第二には、導入はクラスが共有している情報を、応用練習はインフォメーションギャップを使うという点を学んだ。二回目の教壇実習の前にこのアドバイスをいただき、実践することができた。これからもこのことを意識して教案を作っていこうと思う。

テンポのコントロールや指示の明確性などで学習者を不安にさせない工夫については、これからも改善の余地ありとして精進する所存である。

【8月】

〈佐藤美咲〉

(1)担当クラスの日本語レベル：Aクラス

日本語の学習を始めたばかりの学習者が多く、ひらがなとカタカナはある程度書けるものの、漢字はまだ学習途中の段階であった。学習者によって習熟度に差があり、日本語能力試験 N3 を取得している者もいたが、全体としてはそれよりやや下のレベルであった。学習の際は、英語での補足や例文の例示が必要だった。

(2)クラスの様子

学習者は12人で、国籍はアメリカ、イタリア、カナダ、アイルランドだった。年齢層は20～30代が多く、落ち着いて授業を受けている様子が見られた。グループワークで日本語がわからず困っている者には、他の学習者が英語で教えるなどの助け合いが行われていた。

猛暑日が続いた結果、体調不良になる人も多く、6～10人で授業が行われること多かった。

(3)クラスの活動

授業は主にスライドとホワイトボードを使って行われた。担当する先生によって、座席の配置やグループ分けが異なっていたが、話題シラバスということもあり、毎回各回の話題に沿った内容のディスカッションが行われた。授業の流れとしては、ディスカッションに必要な文法や語彙の導入、話題の紹介の後に、学習者それぞれの国や家庭では日本でのそれとどのように違うのか話すことが多かった。

教壇実習では、1回目はペット、2回目は風物詩についての活動をした。

(4)学んだこと

授業目標を常に意識しながら、活動内容や教材選びを取捨選択していくことに課題を感じた。

活動では、学習者の発言に対して一問一答で終わらず、さらに質問を重ねることを意識した結果、学習者の発話量が増えた。しかし、掘り下げるあまり本題から逸れてしまう場面もあり、場の流れを読む判断力を一層磨く必要があると感じた。

教材については、実際に触れることのできるレリアを取り入れたことで、学習者の興味を引き出すことができた。一方で、単語カードを用いたことで、カードの扱いへの慣れなさから黒板に貼る作業で手間取るなど、授業の本題には関係ない部分で時間を使ってしまった。教材を選ぶ際には、その教材だからこそできることを明確に意識し、活動の目的に沿ったものを選ぶ必要があると感じた。

また、授業中に想定外の出来事が起きた際には、慌てず冷静に対応できる余裕を持つことも、教師として大切な姿勢であると学んだ。そのためには、目標に沿った授業デザインと日頃からの十分な準備、学習者との信頼関係や円滑なコミュニケーションの積み重ねが欠かせないと感じた。

〈小泉采生〉

(1)担当クラスの日本語レベル：Bクラス

初めて日本語を学習する学習者がほとんどで、日本語の文字体系にひらがな・カタカナ、漢字があることを知らない学習者もいた一方で、形容詞の種別を知っている学習者もあり、クラス内でレベルに差が見られた。指導教員による指定で、授業で使用するスライドには、すべてに発音のアルファベット表記をつけた。

(2)クラスの様子

学習者の国籍は、イタリア、アメリカ、イギリス、アイルランド、コロンビア、スペインであり、英語やイタリア語など母語使用が多くみられた。学生から社会人までの幅広い年齢層で、お互いをフォローしながら授業を受けており、休み時間には積極的に日本語でコミュニケーションを取る様子も見られた。4週間を通して、和気あいあいとした雰囲気であった。

時間上の制約から、ひらがな・カタカナの導入や練習は行わず、アルファベット表記での教授となったが、カードと対比させながら、ひらがな・カタカナでノートを取る学習者が多くいた。漢字の紹介をした際には、成り立ちに興味を持つなど、学習者の日本語に対する高い好奇心が垣間見られた。

(3)クラスの活動

授業はスライドとホワイトボードを用いて行われた。席は自由としたが、学習者による固定化が見られた。教壇実習では、「位置詞」「イ形容詞・ナ形容詞」の導入と練習を行った。

(4)学んだこと

日本語教育実習を通して、「コミュニケーション」の重要性を深く学ぶことができた。ゼロ初級・非漢字圏の学習者との対面はほぼ初めてであったが、教師と学習者の「教える意志」と「学ぶ意志」が合致すれば、直接法でも授業が成立することを経験した。

授業は教師と学習者との「コミュニケーション」で成立しており、教師は常にアンテナを張り、学習者の発言を逃さないようにすることが重要だと理解した。学習者の経験や発言を授業内容に繋げることで、定着しやすくなる場面や、学習項目外の形容詞でも、発話した学習者のモチベーション維持のために共有する場面を目の当たりにし、教え方のあり方を学んだ。

教壇実習では、教案作成やタイムマネジメント、コーラスのキュー出しなどに課題を見つけ、指導助言を受けながら改善に努めた。実習に先立って立てた目標は概ね達成できたと思うが、速度や強弱のつけ方など、授業のテンポに関わる部分は今後の課題である。本実習を通して学んだことを、今後の日本語教育の道を志すにあたり、常に意識し、アンテナを張って生活していきたいと考える。

【9月】

〈堀江柚菜〉

(1)担当クラスの日本語レベル：Aクラス

JLPTを受験している学習者はいなかったが、自国で日本語学校に通ったり、オンライン教室で勉強したりしている人もおり、N5以上相当の学習者が多かったように思われる。

(2)クラスの様子

学習者の人数は6人で国籍は、イタリア、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、シンガポール、メキシコと多国籍のクラスであった。Otakuコースということもあり、日本のアニメやJ-popに興味がある学習者が多く、スラング言葉や若者ことばを知っており、積極的に使おうとする姿勢が見られた。学習者同士、授業中はもちろん休み時間も日本語で活発にコミュニケーションを取っており、とても賑やかだった。

(3)クラスの活動

授業は主にスライドを用いて行われた。話題シラバスの教材を参考にし、一つの話題に対して話すことができるということを目標としていた。授業では、まずその話題を話すうえで必要な言葉や文型を導入し、文型を使う練習を行い、最後にその日の話題について学習者同士で話し合い、発表するといった形でおおよそ授業が行われた。

(4)学んだこと

授業見学や教壇実習に向けた教案づくり、教壇実習をする中で学習者とコミュニケーションを取ることの重要性、またコミュニケーションしやすい雰囲気づくりの重要性を学んだ。前提として、このクラスは学習者同士も教師とも初対面であったというところで、アイスブレイキングがとても重要であった。授業見学では、導入の部分で学習者の好きなことや日本での暮らしがどうかなど学習者のことについて教師や他の学習者がわかるような質問をしたり、「わたしのじまん」について考え、発表したりと学習者の興味や学習者がどんな人かがわかるような活動を行っていたことで教師側として学習者の語力だけでなく人柄についてもよく知ることができ、学習者同士も打ち解けられていたように感じ、授業でコミュニケーションをするために、させるためにはどうしたらいいかということを考えながら活動することの大切さを学んだ。また、実際に授業をやってみて、教案通りに進めて学習者にとってわかりやすい授業をしなければいけないという意識しすぎるがゆえに学習者と対話できないことに苦悩していたが、担当教官から「間」を意識して、学習者の発言に耳を傾けるといふアドバイスのもと、教案をただこなすのではなく、間をもって学習者とのコミュニケーションを意識したことによって、学習者が参加しやすい授業にすることができたため、コミュニケーションを取りながら授業を進めていくことの大切さは身をもって学ぶことができた。

〈章莉華子〉

(1)担当クラスの日本語レベル：Bクラス

Bクラスを担当し、学習者はアメリカ国籍の女性一名であった。日本語レベルは初級で、日本語学習を始めたばかりだった。そのため、スライドや板書ではローマ字を併記した。授業は基本的に日本語で行ったが、学習者が質問をするときは英語で質問をしていた。

(2)クラスの様子

学習者は一名のみであったが、授業に積極的に参加していた。最初の授業では、授業内容を理解できず英語で「Wait」を繰り返す場面が多くみられた。しかし、授業を重ねるごとに「Wait」を言う頻度が減った。授業に慣れてきた頃には、学習者自ら先生に質問をするなど、日本語学習への意欲が感じられた。

また明るい性格の学習者であり、休み時間には私や先生と英語・日本語を交えながら、前日観光した場所や購入したものについて会話した。時々、Aクラスに行き友達に会いに行くこともあった。

(3)クラスの活動

クラスでは、ホワイトボードやスライドを使用して授業を行った。学習者はローマ字で板書をしていたため、ローマ字表記に誤りがないように気を付けた。

授業の流れとして、最初に「あいさつ」「何月何日何曜日の確認」「前回の学習内容の復習」「授業の導入」「単語の導入」「文型確認」「文法練習」「会話練習・応用練習」の流れが多かった。どの先生方も授業の入り方が非常にスムーズで、徐々に教科書の内容に入っているのが印象的だった。

1回目の教壇実習は9月3日(水)に実施し、『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 りかい』第11課「趣味は何ですか」を担当。2回目の教壇実習は9月17日(水)で第18課「次は京都に行きたいです」を担当した。

最終日に日本滞在期間の思い出の写真を3枚選び、日本語で説明するSHOW&TELLを行った。その他にも書道体験など日本文化を体験できる授業内活動もあった。

(4)学んだこと

実習を通じて、学習者が、答えが分からない時の問いかけ方について学んだ。これまでは、待つ姿勢を意識してきたが指導教員の授業ではヒントをあげることで答えを誘導していた。ヒントを通じて、自力で答えを導くことで学習者の記憶の定着にもつながると考えた。しかし突発的に質問に答えるのは難しいため、事前にどのような質問が来るのかを予想し、どのようなヒントを出すのかシミュレーションすることが大事だと感じた。

次に、会話の広げ方である。教師の問いかけ次第で学習者との会話が広がることを痛感した。教壇実習では、課に登場する文型で会話をすることに頭が一杯だったが、学習してきた単語や文型を組み合わせることで会話のバリエーションが増える。指導教員のお話によると、日本に滞在中の学習者との会話では「パスポート」や「ホテル」等の話題をよく出すという。語彙が限られ

ている中でも、自然な会話の仕方や会話の題材選びについて非常に勉強になった。

上記の他にも、分かりやすいスライドの作り方やスムーズな導入の仕方、学習者と教師の距離感等、多くのことを学ぶことができた。これらの学びを今後の活動に活かしていきたい。

6. まとめ

実習を通して、多国籍で年齢層も学習レベルも多様な学習者に会い、多くの実践的な学びを得ることができた。

最も重要なのは、「教師と学習者、学習者間のコミュニケーション」であり、その前提となる「参加しやすい雰囲気づくり」だと学んだ。特に、学習者の経験や興味を授業内容に積極的に組み込むこと、そして学習者同士の協力を促す雰囲気づくりが、学習意欲の向上と授業の円滑な進行に不可欠であることを理解した。

教授法においては、学習者が共通して持つ情報を使った導入と、インフォメーションギャップを活用した応用練習への展開の方法を学んだ。また、導入は学習者の興味を効果的に引き出す一方で、活動目的に合った適切な教案作成の必要性も課題となることを理解した。

教壇実習を通して、对学习者に関する具体的な改善点が明らかになった。例として、タイムマネジメント、指示の明確性、コーラスのキュー出しといった授業のテンポに関わるスキル、そして学習者が自力で答えを導き出せるよう促すヒントの出し方の重要性が挙げられる。また、教案に固執せず、「間」を意識して学習者の発言に耳を傾ける対話的な授業運営こそが、学習者の積極的な参加を引き出す鍵であるという、現場に出たからこそ得られる学びがあった。

◆実習を振り返って◆

個人レポート概要

フィールド実践を行うに際して、学生は個々の目標を設定し、実践期間中に振り返りのためのデータを収集した。実習終了後、各自の目標に照らしてフィールド実践がどうであったかをデータの分析をふまえて振り返り、レポートにまとめた。

レポートのタイトルと概要は以下のとおりである。

【学内実習：フィールド実践 A】

ことのは

● 柏崎咲月

「学習者が自然体でいられる空間づくりー発話数の変化や自発性の有無に着目してー」

本実習では、学習者一人一人の性格や日本語能力に配慮し、自然に発話しやすい環境づくりを目標としていた。初日は発話量に差が見られたが、学習理解の側面での問題はあまり見受けられなかったため、性格的要因の影響が大きいと判断した。2 日目以降はペアワークを中心に活動を行ったことで、発話の必要性が生じ全体の発話バランスが安定した。また座席配置にも工夫を凝らしたことで、共同作業を通して学習者同士の距離も縮まり、休憩中の会話や自発的な質問も増加した。実習生が学習者の近くに座り共に活動する形式を取ったことで相談しやすい関係を築くことができ、結果として学習者同士の中国語会話が減り、日本語で教え合う様子が自然に生まれた。最終日には教室全体が柔らかに安定した雰囲気となり、諸事情で3 日目から参加していた学習者も自発的に意見を述べられる状態となった。以上より、全員が無理なく参加できる環境を整えるという目標は概ね達成されたと考える。

● 吉田夢「双方向でのやりとりと母国語の使用」

私は学内実習の個人目標として、「双方向でのやりとりをする」というものを設定した。一方的な説明とならないよう、なるべく質問を問いかけるなどして学習者の方にも発言をしてもらえよう計画を立てていた。しかし、全体で質問をすることで発言を積極的にする学習者と発言が控え目な学習者との間で発話量に差が生まれてしまった。実習生が間に入ることで発言の少ない学習者も発言する機会が増えたのだが、同時に母国語の使用が増加することに繋がった。母国語を使用することによって、学習者同士でサポートし合っていた為、必ずしも母国語の使用は否定すべきことではないと実習を通して実感したが、日本語を使用する場面と母国語を使用する場面のすみ分けを明確にすることが重要なのではないかと感じた。

● 高林紗楠「楽しく学びながら双方向に学びのある授業実践」

実習を通し、言語習得は「教える」のではなく、「学習者と共に築く双方向の学び」であると強く実感しました。親しみやすい日本の「お弁当」をテーマに、学習者が楽しく主体的に日本語を伝えることを目標に設定しました。当初、実習生と学習者との間に壁ができてしまうという問題が

ありましたが、座席配置の変更を行うなど、話しやすい環境を構築することで、授業の一体感を高め対話を活性化させることができました。手を動かす活動の有効性は高かった一方で、自由度が高すぎると母語の発話が増えるという問題も生じ、難しさを痛感しました。休み時間を活用して学習者と積極的に会話し、興味・関心を知り授業に活かしていくような取り組みが、学習者にとって楽しい授業を実現するために重要なことであると実感しました。

● 浅田真桜「学習者の表情から授業を変える」

本レポートでは、学習者の表情や発話の変化を手がかりに、授業内容を柔軟に改善した実践を報告する。一日目のクイズ形式では集中の低下が見られたため、2日目にジェスチャーゲームへ変更した。その結果、笑顔や発話量が増加し、主体的な参加が促進された。また、観察メモから料理への関心が高い傾向を把握し、3日目にはキャラ弁づくりを導入したことで学習意欲がさらに高まった。一方で、活動の楽しさを重視しすぎると語彙理解が浅くなる課題も見られた。今後は、活動後に理解確認を組み込み、楽しさと学びの深さを両立させていきたい。そして、授業改善の過程で、学習者一人ひとりの反応を丁寧に観察し、興味や性格に応じて声をかけることが信頼形成にもつながると確認された。これらの経験を通して、学習者の表情に寄り添いながら授業を変えていくことの重要性を強く実感した。

● 谷口幸「学習者サイドの実習づくり—母語の使用—」

本実習は、中国語母語話者の初級学習者を対象に、五日間「食」をテーマとして行われた。筆者は学習者の立場になった授業づくりを目標とし、特に母語使用の効果に注目した。授業資料の漢字表記やペア活動での母語使用を通して、母語は理解促進と心理的安心感を与える有効な手段であると実感した。一方で、母語への依存や多言語環境での公平性など課題も確認された。実習を通じて、母語使用は単なる便宜ではなく、学習者の理解や主体性を支える教育的資源であると再認識した。教師には、母語を使うか否かではなく、学習者がどう理解し成長するかを基準に指導法を選ぶ姿勢が求められる。今後は、母語を橋渡しとして意図的に活用しつつ、視覚資料やジェスチャーなど他の支援手段も併用し、学習者中心の授業設計を探究していきたい。

ビタミンC

● 横田穂乃嘉「学習者視点での日本語教育」

日本語教育実習を通して、学習者にとってわかりやすい授業とは何かを考察した。実習は学内で5日間行われ、「太鼓の名人になろう」をテーマに、日本文化を通じて日本語運用能力を高める活動を実施した。私は「やさしい日本語の使用」「ゆっくり・はっきり話す」など、学習者の理解を助ける七つの目標を立てたが、実際には意思疎通が最大の課題となった。特にゲーム活動では、複数回説明してもルールが十分に理解されない場面があり、学習者目線の伝え方の難しさを痛感した。この経験から、教員が学習者の気持ちを理解し、積極的に質問し合える雰囲気をつくることが重要だと学んだ。学習者の立場に立った授業こそが、より良い日本語教育の基盤になると考

える。

● 飯田和々実 『楽しく学び合える』授業を目指して」

私は今回の実習で「学習者を楽しんでもらい、お互いに学びのある充実した5日間にする」という目標のもと、学習者とともに深い学びを得ることができた。実習を通して、双方向的な授業づくりの難しさを痛感するとともに、学習者と一緒に学び合えることの楽しさを改めて実感した。学習者の主体的な活動と実習中の目に見える変化が成果として得られた一方で、学習者のレベルや理解度に合わせた活動構成、説明の仕方、発言を促す質問方法など課題が多く見つかった。さらに、教える側と教えられる側（＝学ぶ側）という関係性ではなく、教える側も常に「学び手」であるということに気づかされた。活動を進める中で、学習者の反応や意見をもらう度に自分の考えや言葉を見直す機会を得られた。実習生と学習者という枠を超えた関係性を築くことができたことを大変嬉しく思う。この経験を決して無駄にすることなく、人生の糧にしたい。

● 西咲良 「学びと楽しさを持ち合わせた日本語教育」

今回の実習では「太鼓の名人になろう」という活動を通して、日本の伝統文化に触れて楽しみながら日本語を学ぶ5日間を意識した。活動を進める中で、学習者の理解速度や発話量に多少の差があり、その場で補足をしたり進める内容を変更したり、チームで常時話し合いながら柔軟に対応することができた。とくにオノマトペの部分は、話し言葉だけでは伝えることが難しいため、漫画の切り抜きや動画を使用してどうすれば理解を深められるのかを考えながら授業を行った。私自身、学習者から学ぶことも多くあり、日本語を教える立場として日々成長を感じた。最終日は演奏会を行い、より一層まとまりを実感することができた。5日間を通して東女生と学習者全員でこの実習を終えることができたと思う。

● 鈴木美桜 「日本語教育における学び合う姿勢の実践と省察」

本実習の個人的な目標は、学習者と互いに学び合う姿勢を持って活動することであった。このため、学習者の理解度を的確に把握し、分からないことを共有できる雰囲気をつくることに努めた。教壇に立つ際は、問いかけを増やすことで相手の反応を引き出し、説明の間に時間を取るなどの配慮をすることで学習者の理解度を把握し、分からないことを共有しやすくする工夫をした。結果として、理解している時とそうでない時の反応の違いから、理解度を推し量ることができると分かった。またこの時、学習者の発言や他の実習メンバーの動きなどが、活動全体を構成する要素であり、参加する者全員で教室を作っていることを実感できた。また、話し合いだけでなく休憩中の会話が関係性を築いたと感じる。太鼓教室での共同体験を通して、立場を超えた相互理解が深まったことも、相互に学び合う教室づくりに貢献した理由であると考えられる。以上から、学び合う姿勢は授業中だけでなく日常の会話や関係づくりの中で培われるものであると実感した。

● 友田愛 「学習者中心の日本語教育を考える」

5日間の日本語教育実習を通して、学習者中心の教育の重要性を実感した。まず、学習者の日

本語能力や学習目的を事前に把握することの必要性を痛感した。事前に個別のヒアリングを行わなかったため、初日の活動が一部の学習者には物足りない内容になってしまった。しかし、その後は話し合いを何度も重ね、教案を修正し応用的な内容を取り入れたことでより深い学びに繋がった。心理的側面では、ラポールの形成により学習者が間違いを恐れず、安心して発話できる環境を作ることができた。さらに、自律学習の観点からは、学習者自身が目標を設定し振り返る仕組みが不十分だった。協働学習では、グループワークを通じて表現力や相互理解が深まったが、東女生の介入がやや過剰になる場面もあった。学習者の主体性を尊重しつつ、学習者の自発的な発言を引き出すための適切な介入について探求する必要があると感じた

● 松本愛花「学習者と共に作り上げる授業を目指してー学習者の視点に立った実践を通じてー」

私は5日間の実習で、「学習者の視点に立つ」「共に作り上げる授業」を目標にした。私たちのグループでは、太鼓体験とオノマトペ学習を組み合わせた授業を行った。初日は名札作りや自己紹介を通して学習者同士の距離を縮め、発話しやすい雰囲気作りを心掛けた。2日目以降は、和太鼓体験に必要な語彙や表現を導入し、ペアや小グループでの交流を通して理解度を確認した。3日目の和太鼓体験では、講師の動きやリズムを観察し、身体で学ぶ姿が見られ、言葉と体験の結びつきの大切さを実感した。4日目は振り返りやオノマトペ学習を行い、学習者の発話だけでなく書く力も引き出すことができた。5日目には楽器作りや楽譜作りを通して自発的な発言を促すとともに、5日間で築き上げた関係性が実を結ぶ時間となった。実習を通じ、単に知識を伝えるだけでなく、学習者の発話や感情に寄り添う「伴走者」であり、授業を共に作る柔軟性が重要であることを学んだ。この学びを活かし、双方向的に学び合う関係性を大切にしていきたい。

夏野菜炒め

● 松崎未奈「学習者の反応からみる『リラックス環境』

ー声かけと活動設計を通じた安心できる学習空間の創造ー

本実習では、学習者が安心して学べる雰囲気づくりを目指し、声かけやあいさつを通して関係づくりを行った。実践を重ねる中で、学習者がリラックスできる環境は声かけだけでは生まれず、活動内容や進め方の工夫が重要だと感じた。体を動かす活動や視覚的な支援は、学習者の安心感を高め、自然な交流を促した。また、急かさず考える時間を大切にすることで、学習者が自分の言葉で表現でき、私たち自身が自然体に関わることも、雰囲気づくりに影響していた。学習者がリラックスできる環境は、声かけと活動設計の両方によって支えられるものだと学んだ。

● 酒井悠希「風物詩を通して学ぶ日本語教育」

私はこの実習において、「学習者の個性や言語レベルに合わせた支援」と「日本文化を伝える中で、体験をことばにできる力を育てること」を目標に掲げた。

「絵はがきづくり体験」で、夏祭りや紙づくりを組み合わせ、日本の夏の風物詩を五感で感じられるよう工夫した。夏祭りでは、屋台や盆踊りといった文化に触れ、日本の夏の文化について理解を深めてもらうことができた。また、活動の中で学習者同士が自然に教え合う場面も多く、

「学び合いを支える環境づくり」の重要性を実感した。

絵はがきづくりでは、学習者が自分の気持ちを日本語で表現し、文化を自分の言葉で伝える姿が印象的だった。一方で、レベル差への対応に課題もあり、絵カードや写真を用いて理解を支援した。本実習を通して、私は「伝える力」と「つながる力」を育むことができ、日本語教育の意義を実感した。

● 福世美穂子「多文化交流を通じたこころに残る学びの場の創出と実践」

実習では「参加者が『参加してよかった』と感じられるような意義ある活動を実現するため、細部にまで配慮しながら準備・実施に責任を持って取り組み、自身の役割を最大限に果たすこと」を個人目標とし実習に臨んだ。中でも重視したのは、参加者が安心して学べる環境づくりと、学習者を中心に据えた設計・運営である。グループLINEでのこまめな連絡や、活動内容に沿った体験の導入、不安解消のための配慮など、細やかな工夫を重ねた結果、参加者同士の自然な交流や活動に対する満足感が生まれた。全体を通じて、言語支援のみならず、参加者同士が互いに理解し合い、感情や想いを共有するプロセスが、学びに対する主体性や人と人とのつながりを育む重要な要素であることを学んだ。日本語教育の枠を超え、多文化交流に基づいた「こころに残る」学びの場づくりの可能性を実感した実習であった。

● 曾根原瑠乃「日本語教育実習に活かしたこれまでの経験について」

日本語教員養成課程の講義等を含めた大学生活でこれまでに経験してきた様々なことが、この日本語教育実習の細部に活かされていたことを実感した。そこで活かされた主な経験を述べると①学生ボランティアとしての実体験が数学専攻の私に日本語教育に興味を持たせたこと、②2年次に日本語教育能力検定試験の存在を知り挑戦したことで日本語教師有資格者としての活動を始めたこと、③3年次の日本語教育研究での指導案作りの失敗から日本語教育にこだわりを持ったこと、④教職課程（数学（中学・高校）・情報（高校））の教育実習等で教案作りや教壇実習を経験していたことが挙げられる。私は、日本語教師は日本人と海外の方をつなぐ架け橋となる大切な仕事だと考えている。日本が日本であり続けるために必要な活動を日本語教育実習で経験できた。これまでの経験を日本語教育実習に活かすことができたのと同じように、日本語教員養成課程で得た学びは、今後の私の人生に活かすことができると考えている。

● 高萩涼音「授業スタイルの確立—双方向のコミュニケーションを軸にした関係性の構築—」

今回、実施した授業が単に「教える場」を超えて学習者と実習生が共に作り上げる1つのコミュニティとなっていたことに注目した。「みんなで楽しく学ぶ」ことを目標として授業をつくる中、意図的に行った工夫として、①全員参加の体験活動、②「学習者の方々に教わる」時間、③全体発表の前の小グループの活動、④画像・動画やレクリエーションを用いた反復学習、の4点があり、これらにより双方向的な学びの場を実現されたと考える。加えて、意図的ではなかったが⑤対面での宣伝、⑥LINEグループの運用、⑦実習生同士の親しさ、といった要素も、結果的には参加者との関係性の構築に大きく影響したと予想する。授業における雰囲気づくりの重要性を改めて実感した。また積極的なコミュニケーションによる発話回数の増加やより強固な記憶の定着な

ど、「良い雰囲気」がもたらす影響について考える大変良い機会となった。この経験は今後授業以外の場面でも大いに活用できるだろう。

【学外実習：フィールド実践B・C】

インターカルト日本語学校

● 「会話を意識した教壇実習」青島果南

私は教壇実習を行うにあたり、「授業内で学習者と会話を行う」という目標を立てた。教案作成では、ウォーミングアップや導入で学習者が授業時間内に発言できる機会を多く設けることに気を付けた。当日の実習では、投げかけた質問に学習者が積極的に答えてくれ、コミュニケーションを取ることができた。しかし、沢山の学習者が話そうとしてくれたにもかかわらず教案通りに進めることばかりに気を取られ、あまり深掘りせずに短いやり取りで終えてしまった。実習を通して、目の前の学習者の伝えたいことをきちんと受け止めることが大切だと学んだ。これから社会に出て、様々な人と関わる中で相手の話をよく聞き、互いに理解し尊重し合うコミュニケーションを心がけていきたい。また、今後も物事に挑戦する機会を大切に、目標を達成するために多様な立場や視点から方法を考え、実施し振り返ることで成長していきたい。

● 大久保彩愛「実習を通して実感した『人と人との関わり』の重要性」

インターカルト日本語学校での教育実習では、授業見学や先生方からの日本語教育についてのレクチャー、教壇実習などさまざまな経験を通じて日本語教育の現場を多面的に学ぶことができた。なかでも日本語教育における「人と人との関わり」の重要性を実感した。特に教壇実習では、「一人ひとりの興味や特性を生かした授業で学習者に寄り添い、引き付けること」を目標とした。その実現のために授業見学や休み時間を利用して積極的にコミュニケーションをとり、学習者との対話を楽しみながら教案に反映するよう努めた。日本語の知識をただ教えるのではなく、それを「使える」ものにすること、そして学習者を理解し、安心して学べる環境をつくることの重要性を改めて感じた。今後も広い視野をもち、柔軟な対応力と人に寄り添う姿勢を大切にしながら、人間として成長を続けていきたいと強く思う。

● 田村碧彩「積極的なコミュニケーションを取ることの大切さ」

インターカルト日本語学校での実習を通して一番驚いたことは教師と学生の距離感の近さだ。積極的にコミュニケーションを取っている姿が多くみられ、その関係性を活かした授業をしている印象が見受けられた。また、インターカルト日本語学校では目的別クラスという学生が関心をもった分野を自分で選んで受講できるクラスがある。目的別クラスにはディスカッションの要素が含まれるものが多く、学生も意欲的に取り組んでいる。

この実習を通して実習前に抱いていた日本語学校のイメージが大きく変わり、言語を学ぶ上で重要なのはコミュニケーションを積極的にとることだということを実感した。

● 出口陽美佳「『使える』日本語を習得するために」

日本語学校には様々な目的で日本語を学ぶ学習者がいた。インターカルト日本語学校では、「使える」日本語能力を身につけられるように授業が考えられている。通常クラスとは別に、目的別クラスがあることはその最たる例であろう。「使える」日本語を身につけるためには、教師が実践的な授業を行ってだけでなく、同時に学習者自らが実践を重ねていく必要がある。その実践の機会を増やす手助けも重要なのではないかと感じた。

今後も日本語教育には、子供たちへの学習支援を通じて携わっていきたいと考えているが、子供たち以外にも支援を必要としている人がいたら、手を差し伸べられる存在でありたいと思う。その際には、その人が何を必要としているのか聞き、その人が「使いたい」日本語を「使える」よう支援をしていきたい。外国人や、特定の国の人というくくりで考えず、その人自身と向き合っていきたいと思う。

● 水迫里穂菜「学習者の理解を支えるわかりやすい説明の工夫～実習を通して学んだ指導のあり方～」

今回の教育実習を通して、私はわかりやすい説明とは知識を伝えるだけでなく、学習者が理解しやすい形で簡潔に整理して伝えることだと実感した。特に、学習者の母語や経験を踏まえて工夫することが重要であり、なぜそうなるのか、どんな場面で使うのかを例文やイラストで示すことで理解が深まることを学んだ。教師は一方的に教える存在ではなく、学習者と共に考え学ぶ存在であると感じた。実習を通して、互いに学び合う姿勢こそが日本語教育において大切だと気づいた。今回の経験を通して、相手に寄り添う姿勢と学び続ける姿勢の大切さを実感し、いつか日本語教育の世界に携わりたいと思う。

新宿日本語学校

● 岩村佳林「教えることは学び続けること—多文化クラスで考えた教師の役割—」

実習では、「多文化共生の視点を取り入れた日本語教育のあり方を理解する」ことを主軸に、教案作成から授業実施までを実践的に学んだ。実習を通して得た最大の学びは、教える力とは知識

を伝える技術だけではなく、学習者の理解を支えるための観察力と柔軟な対応力であるという気づきである。導入や教材の工夫を重ねる中で、学習者の反応を読み取り、指導法を微調整する力が求められることを実感した。また、授業中に生まれる学習者の「問い」は、教師自身にとっても新たな学びの契機となり、「教えることは学ぶこと」という意味を体感した。さらに、多文化的な教室では、発話意欲や理解の仕方が多様であることを実感し、非言語的なコミュニケーションを含む「寄り添う姿勢」の重要性を学んだ。学習者一人ひとりの背景を理解し、安心して学べる教室づくりが、多文化的な理解や交流を促す基盤であると実感した。実習全体を通して、教師とは学習者の成長を支えると同時に、自らも学び続ける存在であるという確信を得た。

● 田中杏奈「学習者視点の授業構築のためには」

今回の新宿日本語学校での実習を通して、学習者主体の授業を構築するための重要な視点を数多く学んだ。学習者の興味・関心を教材や活動に反映させること、目の前の学習者の状況を即座に判断し柔軟に対応すること、その場にある教材を最大限活用すること、事前にできる限りの準備をしたうえで学習者の反応を見て臨機応変な対応をすることは、実習前に目標としていた「双方向的に楽しく学べる授業」をデザインするために不可欠な要素であった。また、日本語学校というのは、単に日本語教育を施す場ではなく、日本で生きることを総合的に支える実践的な機能を果たしているという気づきも、学外の日本語教育機関に入らなければ意識できなかったことであり、大きな学びとなった。本実習で得たこの大きな学びや反省を、今後の日本語教育の実践に繋げていきたいと考える。

● 茶山琳香「授業における教師の工夫と実践」

見学実習を通して見つけた授業を運営していくためにできることを、教壇実習で実践した。様々な工夫を凝らすことで学習者にとってより良い授業を運営することができるというのは自明のことである。その工夫は授業中の動作に限らず、学習者に何を習得してもらいたいのか、ゴールをどこに設定するのかなど、授業を準備する段階からすでにたくさんの要素を考えていかねばならない。しかし、学習者に「こうしてほしい、習得してほしい」という気持ちを押し出しすぎると、独りよがりの授業になってしまい、学習者を置いていってしまうことがある。わかりやすい授業をつくるために工夫する点として、学習者と同じ目線に立つことから始めることが大切だ。そうすることで、普段は見えなかった学習者の個性を知ることができ、そこからよりよい教室運営にもつながることがある。それらの工夫も、すべては学習者達や学習項目に合わせて使用することが必要である。

● 萩原結花「教師と学習者の観点から考える日本語教師として求められる資質」

今回の実習では、「これまでに学んだ知識を活用しながら現場での実践を通して、日本語教師の役割や学習者についての理解を深める」という個人目標を設定した。授業見学を通して、学習者にとって身近な話題と絡めた対話の多い授業を行うことや、学習者の視点に立って考え、理解状況に応じて柔軟に対応することの重要性、そして学習者の持つ多様性などについて学んだ。教壇

実習では、授業見学で得た学びを踏まえ、対話の機会を多く設けることを意識し、学習者が受け身にならないような授業を行った。実習を振り返り、課題となる部分もあったが、授業見学と教壇実習を通して得た学びや、指導担当教師の方からいただいたフィードバックも踏まえると、個人目標は概ね達成できたように思う。今回の実習を通して、学習者が持つ価値観や背景を理解し尊重する姿勢や教師も学ぶ姿勢を持つことの重要性を学んだ。これらの資質は、学習者にとってわかりやすい授業、双方向型の授業を実現するために不可欠であると考えます。

友国際文化学院

● 小泉采生「日本語教師から学ぶコミュニケーション」

友国際文化学院での約1ヵ月間の実習を通し、日本語教育における「コミュニケーション」の重要性を深く学んだ。授業見学や教壇実習から、直接法でも教師と学習者の「教える意志」と「学ぶ意志」が合致すれば授業は成立すると学んだ。また、授業は教師と学習者との「コミュニケーション」で成り立っており、特に学習者の発言を常にアンテナを張って拾うことが重要だと理解した。学習者から出た項目外の形容詞「すてき」を全体に共有し、モチベーション維持につなげる場面などは印象深かった。教壇実習では、タイムマネジメントやキュー出し、声の強弱などが課題として挙げられた。特に、導入は削れない部分であり、しっかりと丁寧に行うよう助言を得た。また、ウォーミングアップで個々人の話を聞きつつ授業につなげることに苦戦し、自然なコミュニケーションを取れるよう経験を積む必要性を感じた。今後は、今回の実習で学んだことを常に意識し、日本語教育の道を志す上でアンテナを張って生活していきたいと考える。

● 坂崎茉生「教師のマネジメント力ー学習の不安をなくしリラックスした学び合いのクラスをつくるためにー」

今回の教育実習では、①間の取り方、発言を待つこと、「考える」時間の取り方を身につける。②授業ごとの目標を明確にし、それに沿った授業をデザインする。ことを目標に設定した。

実習を通して学んだことは、第一には「授業は先生一人ではなく、全員でつくりあげるもの」であること、第二に導入はクラスが共有している情報を、応用練習はインフォメーションギャップを使うこと、第三には教師による活動の指示の明確さやテンポのパターン化、コントロールが学習者の不安を払拭し学びやすさを左右することである。教師がクラスの雰囲気や活動内容、指示の出し方などをマネジメントすることで、自然と助け合いや学び合いができるクラスの雰囲気をつくり上げることが、何より重要であると考えた。

今後も、明確な活動指示や文型導入で学習者に不安を与えないようにする工夫については改善が必要である。毎度の授業での自分の立ち居振る舞いを振り返り、常に成長し続けたい。

● 佐藤美咲「学習者との関わりから学んだ日本語教育の在り方」

今回の日本語教育実習では、多様な文化的背景をもつ学習者との関わりを通じて、伝える力と考える力を高めることを目標とした。日本語教育は単なる言語教育ではなく、人と人が言葉を通して関わる営みであると考えたからである。実習では、飽きさせない授業のテンポや教材の特性を体感し、教師の姿勢が学習者の意欲や教室の雰囲気大きく影響することを学んだ。また、授業外でも学習者と交流することで、学習者のニーズやレディネスを知るだけでなく、教壇実習での自身の緊張をも和らげることができた。さらにはジェスチャーでのやりとりは言葉のニュアンスを示したり互いの個性を知ったりするのに役立った。教案作成では、授業目標に必要な内容を見極めることの重要性や、柔軟で創造的な授業構成の工夫を学んだ。実習を通じて、言葉を教える行為は改めて他者と理解を深めるプロセスであると感じた。今後は、この経験を異文化理解や多様な人々との協働に積極的に生かしていきたい。

● 章莉華子「学習者への対話アプローチ」

友国際文化学院の実習で最も学んだことは二つある。一つ目は学習者が、答えが分からない時の問いかけ方である。これまでは、待つ姿勢を意識してきたが金子先生の授業ではヒントをあげることで答えを誘導していた。ヒントをあげることで学習者の記憶の定着にもつながると考えた。しかし突発的に質問に答えるのは難しいため、事前にどこに質問が来るのかを予想し、どのようなヒントを出すのかシュミレーションすることが大事だと感じた。二つ目は、会話の広げ方である。教師の問いかけ次第で学習者との会話が広がることを痛感した。教壇実習では、課に登場する文型で会話をするに頭が一杯だったが、学習してきた単語や文型を組み合わせることで会話のバリエーションが増える。金子先生のお話によると、日本に滞在中の学習者との会話では「パスポート」や「ホテル」等の話題をよく出すという。語彙が限られている中でも、自然な会話の仕方や会話の題材選びについて非常に勉強になった。

● 堀江柚菜「対話が生まれる授業づくり」

私は日本語初級学習者との対話の方法を学ぶことを目標に教育実習に臨んだ。授業見学では、学習者の発言に教師が丁寧に反応し、話を広げることで、信頼関係が構築され、対話が活性化することを学び、また教室内での教師の立ち位置や話し方、板書やスライドの工夫が、学習者の発話を促す要素であることも学んだ。模擬授業や教壇実習では、学習者に具体例を考えてもらう活動を取り入れ、理解を深めると同時に対話の機会を増やす工夫を行い、学習者との対話の機会を増やすことができ、話す速度や間を意識することで、学習者が話しやすいテンポを保つことも対話を生むことにつながれたと感じる。そして、授業内容に固執せず発話の機会を確保することが、対話中心の授業には不可欠であると実感した。学習者が失敗を恐れずに話せる雰囲気をつくるのが、主体的な学びと活発な対話につながると考える。これらの経験を通して、学習者との対話を中心にした授業設計の重要性を学んだ。

2025 年度 日本語教育実習報告書

2026 年 2 月 1 日発行

編集 東京女子大学 日本語教員養成課程

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

実習担当者 松尾 慎・吉本 恵子